

北里柴三郎読本

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



北里柴三郎読本 下 書肆心水

北里柴三郎著

北里柴三郎論説選(後篇)

ni-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目次

北里柴三郎論説選（後篇）

北里柴三郎著

演説 ペスト予防接種に就いて	一九〇〇・明治三十三年	14
免疫血清談	一九〇一・明治三十四年	30
伝染病に就いて	一九〇二・明治三十五年	35
演説 慢性伝染病予防に就いて	一九〇二・明治三十五年	49
伝染病の予防に関する二、三の注意	一九〇三・明治三十六年	59
演説 ペスト予防に就いて	一九〇三・明治三十六年	64
演説 流行性脳脊髄膜炎に就いて	一九〇三・明治三十六年	76
演説 二、三の伝染病に対する注意	一九〇四・明治三十七年	91
演説 結核の蔓延及び予防	一九〇八・明治四十一年	99
ローベルト・コッホ先生	一九〇八・明治四十一年	104
ペスト病予防に関するコッホ氏の意見	一九〇八・明治四十一年	104
演説 日本に於けるペスト蚤説の証明	一九〇九・明治四十二年	123
欧洲視察談	一九〇九・明治四十二年	126
演説 伝染病予防に就いて	一九一〇・明治四十三年	135
演説 腸チフス予防に関する注意	一九一〇・明治四十三年	159
故恩師ローベルト・コッホ先生を弔う	一九一〇・明治四十三年	176
医師試験と医科大学	一九一一・明治四十四年	181
伝染病研究所の内務省所管ならざるべからざる事	一九一一・明治四十四年	184

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

労働者の保護	一九二	大正二年
結核病に就いて	一九二	大正二年
挨拶	一九二	大正二年
談話 伝染病研究所辞職の理由	一九四	大正三年
陳情書	一九四	大正三年
挨拶 伝染病研究所全所員に対する告別	一九四	大正三年
北里研究所設立趣旨書	一九四	大正三年
挨拶 北里研究所設立披露	一九四	大正三年
演説 結核療法の進歩	一九五	大正四年
演説 結核の蔓延及びその予防	一九五	大正四年
開所の辞	一九五	大正四年
演説 学問の神聖と独立	一九五	大正四年
講演 コレラ研究の回顧	一九六	大正五年
譚叢 コレラ	一九六	大正五年
譚叢 ペスト	一九六	大正五年
開会の辞	一九七	大正六年
医師奮起の要望	一九七	大正六年
挨拶	一九八	大正七年
コッホ未亡人宛書翰訳文	一九〇	大正九年
式 辞	一九四	大正十三年

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

上巻目次

北里柴三郎伝 宮島幹之助・高野六郎著

例言

生立

立志

修学

進路

ドイツ留学

学勲

皇室の殊遇

伝染病研究所 (その一)

伝染病研究所 (その二)

北里研究所

慶応義塾大学医学部

学界の指導

公衆衛生事業

日本医師会

終焉

北里柴三郎論説選 (前篇) 北里柴三郎著

破傷風病毒菌及びそのデモンスタラチオン

緒方氏の脚気バチルレン説を読む

与森林太郎書

伝染病研究所設立の必要

演説 赤痢病流行に就いて

一八八九・明治二十年

一八八九・明治二十二年

一八八九・明治二十二年

一八九一・明治十五年

一八九三・明治二十六年

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

演説	種痘に就いて	一八九三・明治二十六年
演説	ローベルト・コッホ氏の細菌学上コレラ診断法の現況	一八九三・明治二十六年
演説	恙虫病原に就いて	一八九四・明治二十七年
演説	ペスト病の原因取調べに就いて	一八九四・明治二十七年
演説	免疫試験結果の報告	一八九五・明治二十八年
演説	コレラ病血治療法に就いて	一八九五・明治二十八年
演説	伝染病予防法大意	一八九六・明治二十九年
発言	牛痘免疫法、天然抗毒素の所在についての質疑	一八九六・明治二十九年
演説	伝染病予防接種法に就いて	一八九七・明治三十年
演説	輓今に於ける血清療法の評価	一八九九・明治三十二年
演説	前年中に於ける海外衛生上の報道	一八九九・明治三十二年
演説	ペストに就いて	一八九九・明治三十二年
挨拶		一八九九・明治三十二年

(上巻特別附録) 談話 伝染病研究所辞職の理由 (一九一四・大正三年)
北里柴三郎略年譜

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

北里柴三郎読本

下

北里柴三郎論説選（後篇）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例（本書の底本と表記について）

一、伝記の部の底本は、一九三二年八月発行の非売品『北里柴三郎伝』である。発行所は北里研究所で、奥付に取扱所として岩波書店の名が併記されている。一九八七年七月には北里学園創立二十五周年記念復刻の版が写真版による複製で作られた。こちらも非売品で、発行所は学校法人北里学園である。こちらの版には取扱所の表記はない。同書は、「本伝」「余録」「追憶」の三部に加え、序文数篇と年譜や業績表の資料などにより構成されているが、本書に取めた伝記はこの「本伝」部分である。

一、論説の部の底本は、一九七八年十二月発行の非売品『北里柴三郎論説集』で、その発行所は社団法人北里研究所・学校法人北里学園である。各文章の末尾に掲載誌名を記してあるが、複数の誌名が記されている場合、二番目以降のものは抄録等であるものがある。

一、「読本」を志向した本書では、現今の感覚でなるべく読みやすくなるように、左記のように表記を現代化した。

一、新漢字・新仮名遣いを使用した（旧字体ではなく別体扱いの漢字はそのままに表記した。ただし引用文と見なすべき部分の仮名遣いはもとのままにした。なお、教詞の「壹」「貳」「参」「拾」「廿」「卅」は旧漢字ではないが地の文中では例外的に「一」「二」「三」「十」「二十」「三十」に置き換えた。合略仮名や変体仮名の類は通常の仮名に置き換えた。漢字の用法で現在の主流と異なるものが見られるが、それはそのままに表記した（例、著手）。

一、現今一般の感覚でよく読みにくいと感じられるだろう送り仮名を加減した（例、新しい↓新しい、及↓及び、傷け↓傷つけ、所ろ↓所、又た↓又）。送り仮名の出し方は、音便のあるものは音便表記を基本としたが、当該箇所文体に鑑みて音便のない表記をしたところもある。

一、読み仮名ルビを便宜的に補った。一般には用いられない表記に対しても、そのように読みうるだろうと判断したものには読み仮名を補ったが、それは（ ）で括弧して表記した。例えば「加之」は一般には「しかのみならず」と読み慣わされているが、「加之ならず」という表記に対して「加之ならず」と読み仮名を補ったような場合である。また、複数の読みかたがあつてそのどれも語義が同じである場合にいずれかの読み仮名を補った場合もある（例、宜なる^{ちよくなる}）。

一、引用符は「」を基本として、副次的に『』を用いるやり方で全体を統一した。

一、〔 〕は本書刊行所による補註である。

一、踊り字は「々」のみを使用した(二の字点は「々」に置き換えた)。引用文とみるべきものはそのままに表記した。

一、正誤を判断しかねる場合、あえて訂正するまでもないであろう場合などに原文のままの意で記す「ママ」のルビは()で括り(ママ)と表記した。底本にある(ママ)のルビは()を外して表記して区別した(底本の「ママ」のルビを外して補註で説明した場合がある)。ごく明らかな誤記に限って特に断ることなく訂正した(例、難義しない↓難儀しない)。また「ママ」を書き添えるまでもないと判断したものはそのままに表記した(例、ベット「寝台」)が、近接箇所不統一の関係にある場合はいずれかに統一して表記した。

一、次のような、現今公式の文書においては通常使われない片仮名の用法は平仮名に置き換えて表記した(例、サウして、なって居る、マルで)。その他「ナカナカ、タマサカ」のような片仮名表記も少なからず見られるが、これらは擬音語・擬態語と見なすべきものの他は平仮名に置き換えて表記した。また同様の長音符記号は仮名に置き換えて表記した(例、どーなる、そーして)。

一、北里の論説の中には一篇中に句読点がほぼあるいは全く無いものもあるので、句読点を適宜補った。全体に読点だけが使われている場合もあり、この場合は文末の読点を句点に置き換えた。また句点の脱落と見るべきところも少なくないので、そこには句点を補った。その他、甚だ読みにくいと考えられるところに読点を補った場合、読点を句点に置き換えた場合もある。明らかな濁点の不足も適宜補って表記した。また、片仮名人名の姓と名の間、数値の小数点など、現今通常中黒点で表記されるところが読点である場合、それを中黒点に置き換えた。

一、一篇の文章全体が片仮名表記されているものは平仮名に置き換え、文末に原文は片仮名表記であるむね註記した。置き換え処理に伴って、全体が片仮名表記であるが故に鉤括弧で括られている片仮名語の鉤括弧、および同様の傍線は外して表記した。全体が片仮名表記でない文章においても片仮名語の傍線および同様の鉤括弧は(強調のためと見られるものはなかった)外して表記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にあるものを仮名表記に置き換えた(引用文はもとのまま)。置き換えたものは五十音順に左記のとおり(活用語尾、送り仮名、踊り字の種類とその有無は代表例)。なお仮名への置き換えに伴って加えた中黒点や読点がある(例、和蘭ハーグ↓オランダ・ハーグ)。また、読み方により語感に違いのある場合は漢字のままに表記した(例、此方↓こちら、こなた、このほう、こつち、こち)。

亜細亜↓アジア、亜弗利加、亜非利加、阿非利加↓アフリカ、亜米利加↓アメリカ、亜刺利亜↓アラビア、亜兒加里、亜爾加里↓アルカリ、亜兒格保兒、亜爾箇保兒、亜兒個保兒↓アルコール、安母尼亞↓アンモニア、雖も↓いえども、英吉利、

英吉利西↓イギリス、聊か↓いささか、焉んぞ↓いづくんぞ、孰れ↓いずれ、伊太利、以太利↓イタリア、苟も↓いやしくも、愈↓いよいよ、所謂、謂ゆる↓いわゆる、矧んや、況んや↓いわんや、印度↓インド、維也納↓ウィーン、浦塩斯德↓ウラジオストク、埃及↓エジプト、澳太利、澳他利↓オーストリア、可笑い↓おかしい、和蘭↓オランダ、斯る↓かかる、斯く↓かく、斯の↓かくの、如此、如斯く、此の如く↓かくの如く、瓦斯↓ガス、加答兒↓カタル、嘗て↓かつて、硝子↓ガラス、加里↓カリ、加爾基↓カルキ、規尼漣↓キニーネ、希臘↓ギリシヤ、基督↓キリスト、瓦↓グラム、格魯布↓クルップ、呉れる↓くれる、格魯兒↓クロール、蓋し↓けだし、けれ共↓けれども、斯う↓こう、珈琲↓コーヒー、爰、此、此所、是、茲、此処↓ここ、於是乎↓ここにおいてか、古弗↓コッホ、悉く↓ことごとく、斯、此の↓この、護謨↓ゴム、斯、是、之、此↓これ、虎列刺、虎列拉↓コレラ、斯んな↓こんな、鼻↓さき、扱、偕↓さて、市伽古、市俄古↓シカゴ、併し↓しかし、乍併↓しかしながら、屢々↓しばしば、暫く↓しばらく、実扶的里或、実扶的里亜、実布の里亜、実布埜里亜↓ジフテリア、実扶的里、実布的里↓ジフテリ、西比利亜↓シペリア、爪哇↓ジャワ、瑞典↓スイス、瑞典↓スウェーデン、頗る↓すこぶる、宛↓ずつ、乃ち↓すなわち、西班牙↓スペイン、仙迷↓センチメートル、善那↓ゼンナー(同前)、曹蹻↓ソーダ、其↓そ、其所↓そこ、其の↓その、抑も↓そもそも、夫れ、其↓それ、夫々↓それぞれ、度い↓たい、只↓ただ、畜に↓ただに、忽ち↓たちまち、為↓ため、窠扶斯、窠扶私↓チフス、丁幾↓チンキ、独乙、独逸↓ドイツ、何う↓どう、兎角↓とかく、迎も↓とても、兎に角↓とにかく、兎にも角に↓とにかくにも、兎も角↓ともかく、弗↓ドル、土耳其、土耳其↓トルコ、噸↓トン、何んな↓どんな、乃至↓ないし、猶、尚↓なお、乍ら↓ながら、就中↓なかなか、為す↓なす、抔↓など、并に↓ならびに、紐育↓ニューヨーク、之↓の、諾威↓ノルウェー、貝加爾↓バイカル、巴里↓パリ、恰爾賓↓ハルビン、布哇↓ハワイ、洪牙利↓ハンガリー、漢堡↓ハンブルク、竊か↓ひそか、只管↓ひたすら、比馬拉↓ヒマラヤ、法↓フラン、仏蘭西↓フランス、普魯西、李瀉西↓プロシア、可し↓べし、彼得堡↓ペテルブルグ、波斯↓ペルシア、伯林↓ベルリン、孟加拉↓ベンガル、殆ど↓ほとんど、略ぼ、粗ぼ↓ほぼ、葡萄牙↓ポルトガル、孟買↓ボンベイ、麻掘涅失亜↓マグネシア、洵に↓まことに、亦↓また、儘↓まま、馬克、麻↓マルク、民賢↓ミュンヘン、鼯↓ミリグラム、寧ろ↓むしろ、六ヶ敷い↓むつかしい、墨其哥、墨西哥↓メキシコ、麦加↓メッカ、目出度い↓めでたい、若し↓もし、齋す↓もたらす、固と↓もと、固り↓もとより、八釜しい↓やかましい、矢張↓やはり、已む↓やむ、稍や↓やや、動も↓ややも、漸く、稍く↓ようやく、沃度↓ヨード、歐羅巴↓ヨーロッパ、僕麻質斯↓リューマチス、淋巴↓リンパ、羅馬↓ローマ、露西亞、魯西亞↓ロシア、倫敦↓ロンドン、態と↓わざと、態々↓わざわざ、華盛頓↓ワシントン、僅か↓わずか

北里柴三郎論説選
(後篇)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

演説 ペスト予防に就いて（神田区衛生会総会）

一九〇三・明治三十六年

今日は当神田区の私立衛生会総会にお招きに預りました一場の御話をすることの榮を得ましたのは私の深く光榮とする所であります。私はペスト予防に就いてと云う表題をここに掲げて置きましたが、ペスト予防に就いては私がここで皆さんに御話をしませぬでも、もう皆さんが疾くに御承知のことでございますから、私が御話いたすことも、別段にそう、皆さんに利益のあることもあるまいと思ひますけれども、しかしこう云うことは度々やはり繰り返して御話をした方が宜かろうと思ひますからしばらく御清聴の程を仰ぎます。

ペスト病は御承知の通りに、我が邦では八種伝染病の一に数えられて居る所の伝染病であつて、遠山君は既にその事に就いて詳しく御弁じになったことではございますが、即ち御承知の通りにこの種々なる伝染病、殊にこの八種伝染病の中でもコレラとかペストとか云うようなものは、我が邦の固有の伝染病ではなくして、何つでも外から輸入する所の伝染病でありますからして、実は赤痢とか腸チフスとか始終絶えずあるものならば、余程予防するのにも困難でございますけれども、こう云うように外国から輸入して来る病氣はその関門で予防すればそう困難を感じないで防ぐことが出来なければならぬ訳でありますけれども、七かし総て伝染病と云うものは我々の肉眼で見えぬ所のものでございますから、中々関門で一々これを防ぐと云うことは到底出来るものでありませぬから、それで知らず識らず這入り込んで来るような訳である。

それでペストは我が邦に輸入し初めたのは極くこの頃のこと、丁度今から十年前に這入り込んだのでございまして、極く新しい所の伝染病であります。ヨーロッパでも以前はペストが盛んに流行したものでありまして、紀元後十三世紀の時分などはヨーロッパの人口の四分の一をペストで殺して仕舞つたと云うような訳で、非常な流行をしたのでございますけれども、段々と衛生のこと、即ち伝染病の予防のことなどが開くるに従つてヨーロッパでは既に跡を絶つて仕舞つたので、この数十年前にヨーロッパではペストが跡を絶ちましたからこのペストのことに就いてはこの

頃に至りまして分るようになりましたが、十年前は医学者でもペストのことに注意して居りませぬでありました。それでこれを予防することもいよいよどの道を以て予防すればよいかと云うことは初めてこの頃に至ってその講究が付いたのでございますから、独り日本のみならずヨーロッパでも新しい所の再び若返って新たに這入った所の伝染病と言つてよい。それで総ての伝染病はまだ病菌の分らぬものもございませぬけれども多く分つて居る所の伝染病と云うものは皆それぞれ違つて居る。ペストの病毒である所のペスト菌は何つでも人の身体に這入ればペストを起し、コレラの病原菌である所のコレラ菌が人の身体に這入ればコレラを起すと云うように皆それぞれ病菌が違つて居るから、従つて予防する道も違わなければならぬ。のみならず人の身体に這入る径路も違ふのである。或る物が媒介者となりて人が感ずると云うことは多くの伝染病にあります、その媒介物が違つて居りますから、それで予防のことも違わなければならませぬ。以前は伝染病と云えば同じ方法で人の身体に這入るものと医者も素人も考へて居りましたから、伝染病が一度流行すると即ち天然痘が流行してもコレラが這入り込んで来ても、皆一定の方法で予防しようとして居った。例えば一家にコレラ病があるとすれば直ぐにその部屋を消毒すると云えば硫黄でその部屋を燻して、そして以て伝染病を燻り殺して仕舞つた。それで安心のことだと思つて居った。そう云う風にコレラでも赤痢でも腸チフスでも天然痘でも、流行して来れば皆消毒法は硫黄で燻せばよいと思つて居った。所が病原菌と云うものが段々分つて見ますれば中々燻蒸法位では殺せる所の病毒菌がほとんどないと言つてよい位である。それで昔の予防法消毒法と云うものは何の効もなかつたと申してもよいのでございます。

それで以前は一度コレラが流行るとか何んとかすると以前の人は非常に多く罹りましたからそれでペストもまた同じことで以前はペストと云うものはどう云う径路を取つて人の身体に這入り込むと云うことは分らなかつたのでございますから徒に人が怖がつて居りました。所が段々調べて見ますると丁度コレラ、赤痢、腸チフスと云うようなものが飲水とか或いは飲食物が媒介となつて人の身体に這入ると同じことで、ペストも他のものが媒介となつて人の身体に這入る、その媒介者と云うならば多くの場合は鼠が媒介者となつて来ると云うことはもう既に皆さん御承知の通りのことでございます。それでペストは実は我々の人類の伝染と云うよりもむしろ鼠族間の伝染病と言つてよいのでございます。ペストの流行するときは何つでも鼠が一番に侵かされ、それから段々と人が感ずるのでございます。それ

で今日現に我が邦でやって居る所のペスト予防法と云うものは第一に鼠を駆除すると云うことに重きを置いて居るのが即ちその所以でありますからしてペストが唯今のよう東京市中にもあり横浜にもあると云うようにポツポツと這入り込んで居る際には鼠の駆除と云うものは最も必要のことで、もし鼠と云うものが世界中に絶えて仕舞ったならばペストと云うものは或いは流行らぬで済むかも知れぬ。何ぜならばペストが人から人に感染すると云うことは極く稀なものである。最もペストの中でも肺ペストと云うものは人から人と云うように感染するものでございますが、多くの場合のペスト即ち医者の方で言う腺ペスト、所々のグリグリが腫れて来るペストと云うものは人から人に感染することがほとんどないと云って宜しゅうございます。そう云う風に人から人に感染すると云うことは肺ペストを除くの外稀である。殊に肺ペストと云うものは先年大阪に流行ったときには大分ありましたけれども、その後我が邦には肺ペストがないと云う位である。昨年本所に流行ったときにも一人もない。横浜に流行ったときにも一人もない。そう云う風に肺ペストは稀でありますからもし鼠が無くなるならばペストは平らぐるに違いない。所が中々鼠をことごとく駆除して仕舞うと云うことはこれは到底出来ぬことと云ってよいのでございます。それで今日我々が一生懸命に鼠駆除に力を尽してやって居りますけれども、片方から取れば片方から段々と鼠の子が発育して成長して来ますからズンズン繁殖ると云うので到底東京市中の鼠を一匹も居らぬように取り尽すと云うことは出来るものでない。所で今日ペスト予防の方針と云うものはその事をやって居る。どうしても取り尽しの出来ぬ所の鼠を成るだけ取り尽して一匹でも少なくしなければならぬと云う方針でやって居る。それでこの事は目下の我が邦の現状ではやむを得ぬ。我々はこの外に方法がありませんからやって居るのであります。

それで目下の我が邦のペスト予防法は鼠の駆除と云うことに最も注意をして一匹でも少なくするようにやらなければならぬ。それでこの鼠の駆除の方法に至っては四、五年以来大いに研究して、或いは亜砒酸の団子を拵えて食わせる、或いは捕鼠器にて捕るとか或いは大掃除をして生きた鼠を捕えるとかいろいろの方法をやって先ず今日では鼠駆除の方法としてはこれより以上の手段は他にあるまいと云う位進んで居る。いわゆる駆除の方法が行渡って居ると云ってよい。又その成行きに任して置くと人が鼠を捕ることを怠りますから懸賞の方法を設ける、即ち抽籤に当たったものには懸賞金をやるとかいろいろやって、先ず鼠駆除としては他にこれに優る名案があるまいという。然るに私

をして言わしむれば今日のペスト予防法と云うものはいわゆる泥棒を捉えて縄を縋う方法であつて、実に愚の極の方法をやつて居るのである。しかしこの愚策を献じたのは誰かと云えば即ち拙者などは発頭人の一人で、最もこの愚策を献じた一人である。自らこう云う策を献じて愚策と云うのは甚だ相済まぬのでありますけれども、我が邦目下の衛生状態ではこの愚策の右に出づるものがないものだからこの愚策を一生懸命講じて居るのである。もし後世の日本人が今日の我々のペスト予防撲滅法を歴史上に見て評したならば、実にあの時代の人の馬鹿なことをして無用の骨を折つて居つたものである、いわゆる勞して功なき仕事をして居つたと云うて笑われるに違ひない。しかし笑われても仕方ない。何ぞなれば今日の策としてこれより外に策はありません。或いは鼠を平らげることには就いて或いはペストを撲滅することに就いてはそのペストの流行つた一部分を焼き払うと云う、こう云う乱暴の策もやつたのである。所がこの乱暴の策を献じたのは誰かと云えば先ず拙者と云うてよい。何ぞなれば私が香港に行つたときに香港でペストの流行つたのは支那人の貧民の巢窟であつたのでそこに流行つてはどうしても撲滅することが出来ぬ。さてどうしたならば宜かろうかと云うことであつたから、私は焼き払つて仕舞へと云うことを言つた。それは香港の泰平山と云う不潔な町でありましたが、その不潔な町を焼き払つて仕舞つた。それから先年神戸で流行つたときにも私は行つたが、あのペストの出来た葺合村、今は町になつて居る。あそこはそもそもペストの始まりでありまして非常に不潔の所でありました。ここも一局部にペストが出来たからと云うて健康者も隔離し患者も隔離して消毒をして見て十日間の期限が来たからと云うて立派に清潔にした積りで隔離した健康者の人を呼出して置けば、又四、五日も経つとペスト患者が出来ると云うことで到底これいかぬから焼き払つて仕舞うと云うことを言い出したのは拙者であります。幸いあの地所は三井の地所でありましたから三井に勧めて家屋を買占めさせて、やはり焼き払つたのでございます。横浜を焼き払つたのは拙者ではありませんが、とにかくこれ等は後世から言つたならば悪い例かも知れませぬが、横浜でも真似して焼いたのでございます。それで或る医学博士が昨年東京にペストが這入つたときに、全体家を焼くと云うことは怪からぬことである、そう云うことは野蠻の衛生時代のことで、今日の文明の衛生上そう云う乱暴をすることがいかぬと新聞で喋々論ぜられたことがある。成程真相の文明の人から言つたならばそれはもう野蠻の予防法には違ひない。しかしその野蠻な焼き払いよりもまだ上を越す予防法があつて、そうして今日の我が邦の進歩の状態、

家の構造とか、町の造り方とかこの状態に於てその不潔の家を焼き払ってペストを撲滅するより良い方法があれば拙者共も進んで承ってそう云う野蛮的の焼き払いと云うようなことはしないのである。しかしそう云う博士先生等が悪口は言いますけれども、こう云う方法を以てやれと云うことは示さぬ。勿論自分等も愚策と思つて居るけれどもこの愚策の右に出づる上策を示してくれませぬ。唯口に言うだけでこれを行う方法を示しませぬから、我々の愚策の方法でドシドシ遣つ付ける外、外に仕様がないのである。所が拙者をして言わしむれば、貴様はそれで満足をするかと云えば中々満足はしないのである。今日のペスト予防は大いに不平である。こう云うペスト予防法をやつて居ると云うことは今日我が邦の文明の進まぬことを世界の文明国に向つて示す予防法であつて、学者としては甚だ慨嘆に堪えぬことでございますし、一般の状態から言つてもこの慨嘆に堪えぬ方法で一生懸命汗水を垂らしてやらなければならぬと云うことは実に嘆かわしい次第である。それで我々はこう云う非文明のペスト予防をやらずにも少し進んだ所のペスト予防を講じたいと思うのでございます。それで今日ここに来て居らるる所の諸君は実に東京市中で目貫きの神田区の諸君で、そうして衛生のことに最も熱心なる諸君の御寄合のことでございますから、私もこれ迄やつて居り当局者なども熱心にやつて居る策よりまだ良い策を有つて居るのでございますから、この策を皆さんに御話をして、この策は皆さんが御実行をなすつたならば我が邦もペスト予防の上に一大大進歩を來たし、文明諸国に後れぬで往くだらうと思ひますからその事をこれから御話をいたします。

それでペストに就いて一番怖いのは今御話した通り鼠である。鼠が居りさえしなければ如何にペストが流行つた所が心配することがない。昔のヨーロッパの野蛮国の時代のように一般の衛生のことが進まぬで、人の住んで居る所が丸で今日の豚小屋のような所に住んで居つたヨーロッパの時代には、人口の四分の一もペストのために斃れたと云う慘劇を來たしたこともございましてしょうけれども、今日は決してヨーロッパでは無論のこと我が邦でもそう云うことのある筈がない。それだけは進んで居る。然るにペストを媒介するものは鼠である。その鼠と云うものは何んのために必要かと云うに動物学者に聞いて見ても誰に聞いて見ても余り必要の動物ではなさそうである。これを絶やした所がそう苦痛を感じない所のものであるのでございます。然るにこの必要なる所の厄介なる所の、小さい動物を我々人類と共に同居させて置かなければならんと云うことはどう云うことであるかと云うのでございます。

我々が住んで居る所の家の中に厄介なる所の、不必要なる所の、有害なる所の鼠族をして何せ同居させて居るか。人間の住む所の家にそんな有害な動物を同居させると云うことはこれは厄介に極ったことである。然るに我が邦では恬として顧みない。人の家に鼠が居ると云うことは当り前のことと思つて居る。殊に大阪あたりに往くと鼠は福の神と云うて尊んで居る。大阪で鼠狩りをするると云えば大阪の旧家の者は家の福の神を取られては溜るものかと云うて不平を起します。それで福の神の前に亜砒酸の御団子を備えなければならぬと云うことを言つて鼠狩りをしたのである。それは一般の愚民の迷信から来たのである。何も鼠を置かなければ福の神が来ないと云うようなことはありませぬから、これは必ず居らぬでもよい。そうすれば我々が鼠と同居すると云うことはそもそも間違つて居る。それで鼠との同居をどうか止めて貰いたい。どうか我々の住宅には人類だけが住むようにしたい。所が今日の我が邦の一体の家の構造ではこつちが同居したくなくても鼠が何処からでも這入り込んで来るのである。それで今迄ペストが流行つて以来ペスト予防費と云うものに国庫の金を費し、或いは市町村の金を費し、或いは個人の金を費した金高は全国で何百万、ほとんど千万円に近い金を直接間接に遣つて居るのでございます。然るにそれだけの金を遣つたにも拘らず、東京市でも大阪市でも丸るで鼠を絶やすと云うことは出来ない。これは如何に嚴重なる刑法を拵えて泥棒を絶やすと云うても泥棒が絶えぬと同じで、如何に立派な捕鼠器を使い、その他如何なる方法をやつても到底鼠を絶やすことが出来ない。所がヨーロッパのこの頃のペスト予防法を見ますればヨーロッパでも無論ペストは鼠が媒介となつて来ると云うことは誰も信じて、それでペストが流行れば鼠駆除と云うことをやつて居る。然るにヨーロッパの鼠駆除と云うことはどう云うことをやつて居るかと言へば、家の中の鼠駆除をすると言うことはしない。少なくとも市中では、まあ東京で一言えは神田だとか日本橋だとか或いは京橋だとか云う所で家の中の鼠を駆除すると云うことは思いも依らぬことで、そう云う所で家の中に鼠を同居して居ると云うことがない。ヨーロッパでペストの流行るとき鼠を駆除すると云へば大抵溝渠の中の鼠、或いは市場とか何んとかで、始終交通して戸を開け放して置いて、そうして食物を沢山打つちやつて居る所のその市場に居る鼠、こう云うような鼠を駆除すると云うのはヨーロッパの鼠を駆除する方法である。所が日本では溝渠の中の鼠駆除所でない、家の中の鼠駆除も出来ませぬ。所でどうしてヨーロッパでは家の中に鼠が這入つて来ないかと云うならば、これは家の構造に係るものである。それで東京市、殊に神田区とか何ん

とか云う目貫の場所はどうかして家の中に鼠の這入られぬようにしたい。これは一向何も名案でも高案でもありませんぬけれども、これは誰もやって居りませぬからこれをやりたい。今日東京などでもどう云うことをして居るかとか云えば沢山の金を掛けて床板を剥ぐとか天窓裏を剥がすとかして鼠を捕ると云うようなことをして居ります。それは家中に居る鼠を逐い出し捕えると云うことも出来ませぬけれども、跡でどうかとならば朝に鼠を逐って夕べには鼠がドシドシ這入って来ると云うことはお構いがいい。まあ昼間は逐いやられるが夜になれば又元の巢に帰って来ると云う有様を呈するのは、畢竟家の構造の悪いからであります。それでここに於て拙者は家屋改良論を出します。家屋改良論と云えば馬鹿に金の掛ること、貴様の言うことは金の掛ること、言うべくして行われぬことだと云うことを仰っしゃるかも知れませぬが、どうか皆さんが頭を冷やかにしてしばらくの間御聴き下さることを望みます。拙者の家屋改良は今日の状態で十分出来ることと信ずるのであります。今日在来の家屋を改良すると云うことによりましても成る程多少金が要るに違いない。しかしこれを東京全市から見ても、この東京全市、我々市民から取上げらるる税即ち伝染病予防費、殊にペスト予防の鼠駆除費に取上げらるる金の中々少くない。その金が取上げられぬようになれば我々の家屋を改良した欠損料は数年の後にこれから取り返すことが出来ますから、今日こそ金が掛りますけれどもそんなに無用のことではないと思えます。今日の鼠狩りに金を遣うのはいわゆる焼石に水で、皆棄てて仕舞うのであります。皆鼠狩りに棄てて居る金は一として生きて居るのはない。皆死金になって消費されて仕舞うのでございませぬ。しかしこれを家屋改良に掛けて置けば立派に生きた金になって居るのでございませぬ。それで日本の家の中に鼠の這入って来るのは何処から這入って来ると云うことを先ず第一に考えなければならぬ。それで新しく家を建ててまだ人の住まぬ中には決して鼠が居るものでない。人が住み出してからいろいろの食い物が出来るから溝渠の鼠などが這入り込んで同居をするのでございませぬ。その這入り込むときに何処から這入り込むかと云えば、多くは流しの洗いや口から毎晩這入り込むのでございませぬ。それからその外所々の節穴とか何んとか不完全の所が日本の家屋には多うございませぬから、外から鼠の這入る場所は少なくない。押入れの隅から這入るとか或いは天戸の格子の上を紙で張って置けばそこを破って這入るとか云うように鼠の這入り口がある。日本の家屋が床と土台との間隙が張ってないから鼠所でない、犬や猫も這入ると云うのでございませぬから、中々鼠の這入る場所と云うものは沢山あるのである。

これ等の所を皆塞いで仕舞って、そうして一体外部から鼠を這入らせぬと云うことを第一にしなければならぬ。そうしますればもし家が古くても沢山の鼠が居るとしても一旦その鼠をことごとく駆り尽したならばその後は外から鼠を這入らせぬと云うことになりまますから、その家屋は鼠と同居せぬでもよい安全なる家になるのでございます。それで今度はこう云うことが行われるかどうかと云う問題になって来ますが、しかしこれは行われるのであります。それだけの金を掛れば無論家賃が高くなるに違いない。しかし少ししばかり家賃が高くなった所がいわゆるペスト予防家屋と云うことにその家が名を付けられて居れば中以上の人が少しは高くても喜んで来て住まうようになる。例を申さば隣に鼠が一匹居ってその鼠を捕えた所が有菌鼠だ、貴様の所も定めし居るだろうと云うことで大掃除をやらせる。天窓板を剥がせるとか床板を剥がせるとか荷物を搬げせると云うような乱暴をされますから溜つたものでない。所が今申したような家でいよいよ鼠が居らぬということになれば決してそう云うことをする必要がないようになりますから、そう云う邪魔もされず、そう云う手数も費用も掛けられませぬから家賃を高く出した所でその方が實際経済になるだろうと思ひます。實際貴様はそんなことを言うが、日本の家屋では出来ることでないと言われまますかも知れませぬが拙者は實際実験して居りますのでございます。拙者は近頃ちつぽけな家を建てましたが、総てのものを理想的に、即ち自分の考えて居る衛生上の家を一つ拵えて見たいと云う考えで家を拵えました。先ず第一家が湿けぬようにするとか、何んとか云うことはそれは別段今日御話する必要がありません。先ず我が邦にペストが流行り居りますから鼠と同居せぬだけのペスト予防家屋と云うようなものにしなさいと云う考えでその方針で家を建てました。そうしてどう云う風にして建てますかと云えば、拙者の考うる所では鼠が這入らぬように穴を塞ぎますと外に居る鼠は多くは溝鼠が多いから床の土台の下を潜って這入るのでございます。それでそれを第一に防ぐ方法を講じなければならぬと云うので床の下で犬や猫の這入る大きな間隙即ち床と床の下の土台の所に金網を張りて鼠の這入らぬようにして、そうして家の周囲を一尺か一尺五寸ばかりをコンクリートで敲いて仕舞つたのである。そうしますれば先ずコンクリートで敲いて仕舞って置けば如何に鼠が土をもぐるやつでも這入り切るものであります。そんな深く這入るものでありません。それで外から家の中に這入るものを防ぐことが出来た。それで今度は小さい所で最も注意しなければならぬのは流し口である。何処の家でも流しには水を棄てる。或いはちよいちよいた塵を棄

てるから、小さな排泄口があつて水が流るる様にしてある。所がその口を開け放しをして居る。もし人が台所に居らぬとき鼠が来そうだと云うときに覗いて御覧なさい、何つても鼠が流し口から這入つて来ます。或いは夜、罌を掛けて御覧なさい、丁度魚捕のような袋を掛けますれば何つても鼠がその罌に掛けて居ります。斯様に台所の流し口は鼠の最も出入する剣呑な所でございますから、そこには鉄か銅線の網を張つて置くべし。それから日本家は庇の間の所には小さい板が嵌めてあります。あすこが風が吹いたりすると板が落つこつてそれから鼠が伝つて天窓に這入ります。そう云う所に注意をして総て細かな所に先ず注意をした。所が或る時鼠が一匹這入つて来た。それでこれだけの注意をしたが鼠が這入つて来た。どう云う訳だろう。天窓裏に這入れぬようにして置いたのにどうして這入つて来たかと云うことで鼠を捕へ出しましていろいろ講究をして見ました所が、成る程不注意の点が一ヶ所ありました。それは台所の戸を締める所に御承知の通り戸を締めるときに手を入れる穴がある。それから手を入れて戸を締めるのであるが、戸が締つたら口が内の方になるように付けて置けばよかつたが外に付けてあつたから鼠がそこから這入り込んだと云うことが分つた。そう云う立派な証蹟が見えた。それからそこを塞いだ所がその後一年間経過するけれども鼠が一匹も這入りませぬ。外の溝渠にはどうかと云えば鼠が居るのでございます。それで私の処では家の中の鼠駆りをする必要がありませぬからヨーロッパの溝の鼠を駆るように溝鼠駆りをするようになって居る。これは私の所の高の小さい家の例でございますから、今日本の家を煉瓦造にしなければならぬ、石造にしなければならぬと云う大袈裟のことをすれば丸で改築しなければなりませんから金の掛ることでございませぬけれども、そう云う大袈裟の事をしませぬでも今有り触れた家に多少の注意をすれば立派に鼠を同居させぬだけのことがわずかの金で出来るのである。我々が今日ペストのために大合戦をして居ると云うことが実に無益の勞をやつて居るのである。ここで一つ皆さんが東京目貫の神田区の諸君はどうかペスト予防の家屋を成るだけ多数に御拵えになりたい。そうしますとペスト予防家屋では鼠を探そうとしても居りほししないと云うようになりませんから、家の中で鼠駆りをして天窓裏を剥がすとか大騒動をせぬでも唯溝の鼠を駆りさえすればよいと云うことになるから安心なものである。そのみならず、もし家の周囲に鼠が居つて有菌鼠があつた所がこれは大騒動をやる必要がない。有菌鼠が一匹か二匹家の外で罹つて居つたとてそんなにペストが感ずるものでない。今迄流行つた例でも分つて居る。大阪でも横浜でも本所のペストで

も外でペストに感じたと言ふ患者は一人もありません。皆家の中で感じて居る。殊に本所あたりはよい例である。本所のある紡績会社のペストの伝播を御覧なさい。鼠が初め沢山ペストに罹って死んで居る。そうしてペストに罹った鼠が何処に居ったかならば、初め罹った女工の居った押入れの中に居った。布団を引き出して見ると布団の中にも鼠が死んで居る。それを解剖して見ると有菌鼠であった。そのペストに罹った鼠の死んで居った所に居った人が皆罹って居りまして、寄宿舎外の外から通つて来る職工に罹ったと言ふものは一人もありません。それは単り本所の例のみならず横浜にしても神戸にしても大阪にしても皆そうである。我が邦でペストに罹った人と云うものは皆家の中の鼠がペストに感じて、そうしてそれから人が感染したと言ふことは立派に証拠立てられて居ります。それ位に人とペストと云うものは鼠と云うものが密接の媒介するものでありますから、鼠が家の中で感じて居っては溜つたものでありませぬ。所が家の外に居る鼠がペストに罹った所がそんなに怖いものでない。そこでこの後ペストを予防するには先ず家の中に鼠を置かぬようにする。今日の鼠狩りもよいけれども、或る所の鼠を逐出しても又再び入つて来ると云うように、鼠を逐出すと云うことをして居った所が今の構造でも出来ないものである。それで今御話したような構造ならば立派に入れぬようにすることが出来ますから、そうしたならばペストと云うものは今日のように大騒動をやって鼠を捕えぬでも予防が出来るかと拙者は考へるのである。それで詰る所もう一つ望めば無論丸で家の構造を換えて仕舞つて、この会堂のような煉瓦にするとか或いは石造にするとか云うようにすればヨーロッパのようになつてまだ安心でございましょうけれども、これは我々が今日望んでも行わるるものでもなし、又我が邦の氣候とか地震とか何んとか云う関係から必ずしも煉瓦にしなければならぬ、石造にしなければならぬと云う必要は決してないと私は考へる。それでその邦の狀態に依つて家の構造とか何んとか云うものも無論やらなければならぬ。しかし丁度滋養物を非常に食べば人の身体が丈夫になる、ヨーロッパ人が肉を食うて不消化物を食わぬから身体が強いと云うて我が邦ではことごとくそれをやったならばどうでございましょう。案外そのために身体が弱くなつて来ましょう。それと同じで土地氣候等に依つて家の構造も余程注意しなければなるまい。それは百年も経つたならば我が邦の人が茶漬飯に沢庵漬を止すようになるかも知れませぬけれども、今日の日本人で茶漬飯に沢庵を食うことを止せと云うたならば日本人が痩せて仕舞うに違ひない。茶漬飯に香物と云うものは生理学や何かの方から言つたならば不滋養物のものかも知れませぬ

が、これは我が邦の習慣だから仕方ない。勿論満場の諸君でも茶漬飯に沢庵を止めと言われたならば大不平だろうと思ひます。私初め沢庵を廃して仕舞うと云うようなことは大いに困るのでありますから、それで家屋のことも一足飛に突飛のことをなさいでも、我が邦の家屋をして在来ものを改良したならば第一にこのペストと云う厄介物を防ぐことが余程都合がよからうと思ひます。

これから外国のペストに対する例をちよつと申しましようと思ひます。一昨年はグラスゴーで博覧会を開こうとした。所が御承知の通りにグラスゴーの港に着いた船がペスト患者を担ぎ込んだのである。船に乗った船員が一人ペストに罹つてグラスゴーの港に上げられたのである。所が港の不潔なる家に二、三のペスト患者が出て来た。一時はグラスゴーの人が驚いた。それにも拘わらずグラスゴーは大きい博覧会を開いたのである。そうして平気で人もその博覧会を見に来ました。所がグラスゴーの一貧民部落ではペストが流行つて居る。イギリスがどうしてそんな乱暴なことをして居るかと云えば東洋人の頭で聞いて見れば乱暴なようであるが、英国などでは如何にも貧民部落ではペストが流行つて居るけれどもわずかその部落に二人三人あつたのみで、他の健康な所は衛生上総て完全して居るから博覧会を開いても何んともない。不健康地に一人や二人ペスト患者があつたと云うて文明の機関の発達を止めると云うことが出来ぬと云うて居る。成程彼の文明国に於ては鼠と同居して居るような所の住民でないからペストが流行ろうが平気な訳である。日本の如きは大阪でもし一人のペスト患者が発したならば博覧会を閉ざして仕舞うには相違ない。我が邦の衛生の状態から言へば鎖ざして仕舞わなければならぬ。そのままにして置けば、蔓延して仕舞う。我が邦はコレラが這入つたならばコレラが流行する、ペストが這入つたならばペストが流行ると云う工合になつて居りますから、一人のコレラ患者があつても、一人のペスト患者があつても、博覧会を閉さなければならぬ。公衆衛生の本統に行き届いて居る文明国と公衆衛生の行き届かぬ半開国との差とはその一点でも分つて居るのである。実にそう云う点是我が邦では實際恥しいことだが大胆なことが出来ぬのである。イギリス人はそんな乱暴なことをして居るようであるけれども一方は予防するし、博覧会は博覧会としてやると云う訳でありますから、行く人も安心して行くことと云うような訳であります。どうか我が邦でもそう云う風にした方がいいものである。そう云う風にするには御互いに衛生に熱心な人が誘導して往かなければならぬ。それでペストでも今のような愚策をやつて騒いで居るのであります、私は愚策

と云えば大いに当局者のやつて居る所を攻撃するようでございますけれども、我が邦ではこの愚策をやる外上策がないからやつて居りましたけれども、これは実に悲しいことでございます。なお一步進んで鼠と同居させぬような域に進んで来たならば今日のような無用の金を費し無用の手数料を費やさぬでペストを防げることになるうと思ひます。しかし我が邦のやつて居る愚策すらまだ行ないの出来ぬ邦がありますから、そう云う邦に較べますれば我が邦は一步進んで居ると思ひます。それは何処かと云えばインドでございます。インドはイギリスの領土になって居りますが、イギリスは殖民地は放任主義にして居ります。それでボンベイに先年ペストが這入り込んでから先ずボンベイは今日世界のパストの本来になって居ります。所がどうしてボンベイの人々がペストを撲滅させることが出来ぬかと云えば我が邦でやつて居る鼠駆除さえも出来ぬのでございますから、本年になってから既に何十万と云うペストを出して居る。それで世界中にはそう云う邦もありますから、そう云う邦に較べますれば我が邦のペスト予防は実に熱心に狂奔して居る結果、鼠の間にはまだ東京でもポツポツ有菌鼠を見ますけれども人がペストに感ずると云うことは極く稀である。その方から言えれば我が邦のペスト予防は世界に誇つてよい。何ぜなれば人間のペスト患者を余計に出さぬのは大変な腕前だ。これは私が自慢するでもないが外国に誇つてもよい。これは外国人が驚いて居る。私の知つて居る外国の友達などは日本のあの有様でペストが一旦這入つてもどうして流行せぬだろうと云う問を起したから、我々はそれに対しては秘伝を以てやつて居るからかくの如き結果を得るのであると法螺を吹いて居りますけれども、実は苦しい。非常な金を使って鼠の尻を追驅け廻つて困苦して居る。東京にても、先ず警視庁の第三部の諸君を初めとして諸警察署の諸君はほとんど鼠狩りに狂奔して鼠と打死をしなければならぬと云う、騒ぎであります。この位、骨を折つてペストを人に伝播させては溜つたものでありません。まあ今日はこれで……

（大日本私立衛生会雑誌、第二四三号、三八九—四〇五頁。細菌学雑誌、第九二号、四六四—四七六頁）

伝染病研究所の内務省所管ならざるべからざる事

一九一一年・明治四十四年

伝染病研究所を文部省に移して医科大学内に置くべしとの説の不可なることに就いては先般内務当局に愚見を披陳したることあり（その写し別紙の通り）しが頃日更に聞く所によれば仮令これを医科大学内に置かざるもなお文部省所管に移すべしとの説をなす者往々にしてこれありと。然れどもこれもまた前者の説と逕庭する所甚だ遠からず。その不可なる点に於て何等拈ぶ所なし。けだし毎時説く所の如く我が伝染病研究所は医事衛生事務、殊に伝染病予防事務に関する審事機関として設立せられたるものにして教育学芸に関する事務と些かの因縁を有するものにあらず。再言すれば内務省の主管たる衛生行政上特殊の部局にして文部省の主管たる教化行政上の機関たるにあらざるに、然るに今甲乙これが所管を変ぜんとするが如きはいささかもまた深く思わざるの甚しきものにして、しかもまたドイツの覆轍を踏まんとするものなりと言わざるべからず。彼のドイツに於ては説者の言うが如く多年医事衛生行政事務を文部省に属せしめ来たりしが政務運用上の不便を感ずることようやく甚しく遂に昨年に至りこれを内務省所管に移したるものにして、爾来同省は衛生院中の伝染病研究所及び衛生試験部を自己の審事機関として政務の敏活を図ることなほ我が内務省の伝染病研究所及び衛生試験所に於けるが如くなせり。而してかくの如く制度の変更を敢えてしたるは寧ろ彼れドイツが我の美制を学びたりと謂うも可なるべきに、その模範となりし我が邦にして却りてその美制を捨てんとするは識者の一笑を禁ざる能わざる所なるべし。

いわんや内務省はその所管に伝染病研究所を置いてこそ平時に於て医事衛生に多大の便益を有するは勿論、一朝伝染病の流行猖獗を逞しゅうするに方りても一令の下にその職員を指揮しその製造に係る治療予防材料を使用して迅速にこれが予防撲滅を図るを得べけん。もし然らずしてこれを文部省の如き他省所管の下に置かんか、その命令容易に行われず、左枝右梧、いづくんぞ能くその政務の執行を敏活ならしむるを得ん。これを要するに現時内閣に於て調査せられつつある行政整理なるものは那辺に向てその鋭鋒を揮われんとするものなるやを知らずといえども、その程度

の深淺範圍の広狭如何に拘わらず右等我が伝染病研究所の所管を変更せられんとするが如きは断じてその不可なるを信じ敢て一言を述べて瀏覽を煩わすと云爾。

伝染病研究所長 医学博士 北里柴三郎

制度及び財政整理に際する伝染病研究所の問題に付意見書

過ぐる明治二十五年、不省の歐洲より帰朝するや二、三識者の幫助により一個私人の事業として伝染病の研究に従事せんとしたりしが会々大日本私立衛生会なる私立団体に於て伝染病研究所を創設し不肯にその研究を一任したるを以て不省は同年以降三十二年三月まで同会設立の伝染病研究所に於て専ら各種伝染病の原因及び予防治療法の研究に努め、併せて各種治療血清類の製造に従事したり。而して同所は帝國議会の建議に基き国庫より二十六年以降三十二年度まで六ヶ年間年々金一万五千元ずつの經常費補助及び二十六年度に於て別に創立費補助二万円の下附を受けしが、創立後幾ばくもなく血清療法、殊にジフテリア血清の効力顯著にして世人皆その惠徳に頼らんことを望むに及び、政府はその製造を民業に一任するを不可なりとし二十九年七月内務省所管に血清薬院を置き私立衛生会伝染病研究所に於て成功したるジフテリア血清製造販売の事業を引上げて官業となしたるを以て、その間不肯は一面には官設なる同院に一面には私設なる伝染病研究所に作業しつつありたり。

然るに一般伝染病研究の事業もまたその成績逐年佳良なりしにより政府は三十一年度限り私立衛生会に對する国庫の補助を止め、翌三十二年度以降国立伝染病研究所を興し不省を以てその所長に任ぜられたり。ここに至りて当初私立衛生会伝染病研究所の事業は全く官業に移易することとなれり。

政府が伝染病研究所を国立となしたる理由は実に左の如くなりき。

大日本私立衛生会伝染病研究所は二十六年度より三十一年度迄毎年国庫より若干円の補助をなし來たりたるが該研究所の事業は開所以來着々その効を奏し漸次発達の道途にあるを以て今後益々その事業を擴張助成するの必要を認め三十二年度より国立伝染病研究所を起さんとす云々

痘苗の製造販売も二十九年七月大日本私立衛生会牛痘種継所より移して国家事業となし三十二年以來不省またその

痘苗製造所を掌理せり。

かくの如くにして三十六年に至りしが不省は伝染病研究所、血清薬院及び痘苗製造所が三所に鼎立して各別にその事業を經營するの國家經濟上頗る不利益なるを思いこれを一衙に合併するの議を時の内務大臣閣下に稟申したるに、政府は機の熟するを待ちて遂に三十八年三月血清薬院、痘苗製造所の官制を廢止し、同時に伝染病研究所官制を改正せられたるを以て、爾來血清及び痘苗の製造販売また直接我が伝染病研究所の主管となり同年六月現在の位置に庁舎をも合併改築して以てこれを今日に及べり。

以上は既往に於ける不省と伝染病研究所との關係及び伝染病研究所の沿革を略述したるものなるが頃者内閣に臨時制度調査事務局を設置せられ諸般の制度及び財政整理に關する事項の調査を開始せらるるに方りその余波或は我が伝染病研究所に及びややもすればこれが廢止説もしくは文部省に所管換説等の生出するなきを保せず因りて左に是等の説の共に短見採るに足らざる所以を述べ以て天の陰雨せざるに先がけて牖戸を網繆せんと欲す〔牖戸網繆、災いを未然に防ぐために窓や戸の緩みを締め付けて修繕する〕。

伝染病研究所廢止説の不可

伝染病研究所は國家衛生の審事機關として伝染病その他病原の檢索、予防治療方法の研究、予消毒治療材料の檢査、伝染病研究方法の講習及び痘苗血清その他細菌学的予防治療品の製造に關する事務を掌る部局にして目下の如き國家衛生事務の多端なる秋に方りては最もその存立の必要を認む。否、文明生活に於ける生存競争上特に一日もこの機關なかるべからざるなり。彼の本邦に於て歐洲と同時にジフテリア及び破傷風血清療法を創始し、なお各種の血清及び予防液類を製造したるが如き、世界に先がけて赤痢病原菌及びペスト病原菌を発見したるが如き、全國に於ける約二千の醫師その他に對し細菌学及び伝染病学を講習せしめ、以て我が衛生行政に裨益したるが如き、その他学術上及び實際上公衆及び個人衛生に各種の利益を供与したるが如き皆これ伝染病研究所の効果にして、もし十數年前に同所の設置儼りせば伝染病に對する我が衛生世界はなお永く闇夜の裡にありて未だかくの如き曙光を拝する能わざりしやも知るべからず。けだし世篤学の士なきにあらずといえども然かも專攻の府

に於て専門の学を精査するにあらざるは伝染病研究の如き複雑深遠なる事業を成就すべからず。又痘苗血清等の製造に就きてもその品質の精良、供給の豊富、而かも価格の低廉ならんことを期せば一にこれを官営事業に待たざるべからず。いわんや同所諸般の事業は前途益々多望なるに、一朝これを全廃せんと称するは不肖その何の理由たるを解する能わざる所にして、むしろその短見を喫驚せざるを得ざるなり。

伝染病研究所を文部省の所管に移すべしとの説の不可

伝染病研究所の存置するもこれを文部省に移し医科大学の職務とすべしとの説また不可なる、けだし国家衛生の審事機関は欧洲各国概ね大学その他学事の府を離れて別にこれを設置せり。例せばドイツ国の如き、コッホ氏伝染病研究所その他の設備あるに拘わらずなお衛生院中特に伝染病研究の一科を設けて自由に伝染病の予防救治に関する方法を考查研究せしめ居れり。これ言う迄もなく社会民衆の幸福を保持し国家経済の損害を防遏するがためその研究の結果を直接に衛生行政に応用せんとするものなるが、特に本邦に於てもしこれを大学に合併せしめんか、大学はもと教化の府、自からまた一定模型のなきを得ず一定模型には又自からこれより生ずる弊ありて、その検束により活動発展を妨ぐるることなきを免かれざるは事実に徴し明かなる所にして、強いてこれをその模型に合せしめんとすれば恰も円柄に方撃を擬するが如く到底その齟齬入り難きを奈何んせん。当路者夙にここに見るあり、ために現下の如き制度を設けたるに一朝にして復た学事の府に移すべしとの説をなすは全くその設立当時の趣旨を誤認したるに外ならず。いわんや痘苗血清の製造販売事業の如き各種研究事業と本来の関係を有し、而かも伝染病予防事務等に関する衛生行政上必須のものなるにこれをも内務省所管より分離して文部省所管に移さんとするは不省その何の理由たるを解する能わざるところにしてまたむしろその短見に喫驚せざるを得ざるなり。

以上に於て伝染病研究所の如き機関は到底これを廃止もしくは他に所管換えすべきものにあらざることを略説したが更に進んで我が伝染病研究所に於ける経済上の状況を述べんに経常歳出総額の約八割は生産的事業費にしてその

支出の反面には支出額以上の収入あり。今試みに最近三ヶ年度の実績に就きてこれを見るに事業費中各種病原の検索、予防治療方法の研究、予防消毒治療材料の検査及び伝染病研究方法の講習費にありてはその収入額は支出額の約三割強に止まるといへども血清類調製及び配送費に対する収入額にありては単に支出の全額を償うのみならずこれが間接費とも云うべき前記病原の検索及び予防治療方法の研究費等に対する収入の不足を補充してなお若干の余裕あり。もしそれ痘苗調製及び配送費また公衆衛生の必要により市町村に於ける強制種痘用痘苗を定価の半額にて売捌くに係わらずなお支出額に対し約六割の収入あり。而して右事業費以外の費用を合算したる経常歳出総額を同歳入総額に対比するも歳入の不足は極めて僅少にして、四十一年度に三万六千余円、四十二年度に二万三千余円、四十三年度に一万八千余円を算するに過ぎず（別表参看）。これもとより一方経費の支出を節約緊縮して一方鋭意諸般の収入を図りたるに由るものなりといへども、以て伝染病研究所設置のために国庫の負担する所甚だ輕微にして財政上格段の影響なきを知るに足るべし。

噫我が伝染病研究所は国家衛生の重要な審事機関として既往及び現在に多大の効果を収め前途益々その有望の地歩にあること上記の如く、而かもその経費に於て夙に節約緊縮を加えたる結果、国庫に負う所極めて僅少なることまた上記の如し。説者何を苦しみてこの国家の寵児を疎外せんとするや。台閣明あり幸いにこれが現行の制度及び経済を更改せらるることなくんば単り我が伝染病研究所の光榮のみならず、また実に本邦衛生行政の一大幸福と云うべきなり。

いさかか卑見を述べて以て清鑒を煩わすこと爾ぶり。〔原文片仮名〕

（北里研究所所蔵）

自治41年度 至同43年度 3ヶ年度伝染病研究所歳出入計算表

経常歳出

費目	明治41年度	同 42年度	同 43年度	備考
俸給	26,917,950 ⁽¹⁾	26,934,800 ⁽¹⁾	29,810,220 ⁽¹⁾	明治44年度分は別紙「当所の歳計及び当所と衛生行政事務との関係」に掲載しあり
事務費	14,922,100	14,151,660	14,970,870	
事業費	158,307,050	162,198,720	196,209,700	
検査及び講習費	15,650,947	16,353,235	14,343,535	
治療費	13,983,653	13,330,975	13,816,550	
血清類調整及び配送費	95,293,950	99,882,800	126,654,105	
痘苗調整及び配送費	33,378,500	32,631,710	41,395,510	
諸支出金	298,330	163,100	73,800	
総計	200,445,430	203,448,280	241,064,590	

経常歳入

種類	明治41年度	同 42年度	同 43年度	備考
検査、講習及び治療収入	9,357,860 ⁽¹⁾	11,079,340 ⁽¹⁾	13,787,360 ⁽¹⁾	
検査料	58,000	61,000	601,000	
講習料	1,680,000	1,500,000	1,860,000	
患者入室料	5,768,000	6,176,000	8,850,000	
外来患者料	1,851,860	3,342,340	2,476,360	
血清予防液代	134,259,450	145,792,640	183,511,080	
痘苗代	20,166,135	22,318,940	24,594,980	
官吏、遺族扶助法納金、その他収入	472,520	496,500	443,120	
総計	164,255,965	179,687,420	222,336,540	
歳出入差引額	36,189,456 ^(ツツ)	23,760,860	18,728,050	

談話 伝染病研究所辞職の理由

一九一四・大正三年

本月五日であった。文部大臣から喚ばれたので何の用かと早速往つた処が大臣は突如として曰く、今度内務省所管の伝染病研究所を文部省所管に変更する。これは行政財政の整理の結果に外ならぬ。則ち学術を統一する目的である。同じ政府の管轄の下に在る処の学問の研究機関を一は文部省の所管とし一は内務省の所管となすは不都合に付きこれを統一し齊しく文部省所管の下に在る大学と合併するは現内閣の方針である。而してこの事は既に閣議に於て決定し今將に御裁可を仰がんとしつとあると言われた。この大臣の言に対して私は今日始めて貴下からこの事を承わるのである、私の監督官庁たる内務大臣及び次官等は未だかつてこの事に就いて話をされな、而して又官報にも未だその事を発表されぬにも拘らず今突然管轄違いの文部大臣からこれを承わり「ああ然うでございますか」と申上げるのみでは甚だ無意味のことと思うが、去りとて又既に閣議で決定し御裁可を仰がんとするまでに事実進捗せりとあつては今更何をか言わん、不日官報に勅令を以て御発表になつた上改めて御趣意は承わらんと述べた。然るに文部大臣は重ねて、否今日は内談であるからと言つて縷々伝染病研究所を文部省所管に移す所以を談じ、文部省の所管になれば施いて大学の管轄則ち帝国医科大学に附属させ総ての事を医科大学の今日の組織に変更するとの談であつたから私は更に言つた。もし閣議にして決定前ならば……勅裁を仰がんとするまでに立到らぬ前に私にこの話があつたのならばこの所管変更の利害に関しては充分議論することがある、しかしながら事今日に運べる以上は紳士の分として自分の意見を開陳するを潔しとしない、勅令の前にはただ沈黙あるのみであるから何れ公表の上更に御召喚の時に罷り出ましよう、且つそれまでに自分の進退に就いては熟考いたして置きましようと云つて別れたのであるが、去る十四日よいよ勅令を以て官報に發布され、十六日に再び来省せよとの文部大臣の召喚であつた。大臣は曰う、先日内意を伝えた通り官報を以て勅令を發布されたに就いては今後も従前通り伝染病研究所々長として努力して貰いたいとのことであつた。私は文部大臣に向つて言つた通り、内意を伝えられた時から今日まで約一週間の日子を重ねた、この間自

分の進退に就いて熟慮したが由来私が今日まで執つて来た伝染病研究所の方針は貴下の謂わるる総てを大学に隸屬させてお遣りになろうとする方針とは根本に於て議論を異にするのであるからこの際これに服従してその職に在るは我が良心に問うて疾しき処あり、因つて潔よく辭職すると述べた。これに就いて大臣は懇々説諭されたれども私は断然決意を固うして大臣の前を辭去したのである。去りながら彼の伝染病研究所は殆ど三十年前に創立して、爾来苦心慘憺經營を積んだ場所だから、普通の諸官省の官吏の更迭、彼の内閣更迭の時に大臣が椅子を退いて事務を後任の大臣に引継ぐように容易には往かぬから決意を大臣に通ずると同時に藉すに若干の時日を以てせられんことを冀い、いわゆる飛ぶ鳥は跡を濁さずして後任者に引渡したい考えて数日来整理に着手し、去る十九日よいよ正式に文部大臣に辭表を提出した次第である。さて何故に私がかくの如く辭意を固うしたか、これ実に感情上の問題ではない。因つてここに私が文部大臣の切なる勧告のあつたにも拘らず辭職した理由を江湖に向つて明かに表明して置きたいと思うのである。その理由はさきに文部大臣に述べた如く、私の學術研究方針が今日の大学の方針と全然趣を異にして居るのであるから、學者の立場として自分の研究方針を抛つてまで職に屈従することは學問の神聖を保つ上に於て出来得べからざることである。則ち大学は學生を教育するのが主なる目的であるので、大学の教授等が個々専門の研究をなしつつあるは全く後進を教育するの余暇を以てするのであつて、言い換えれば教授の専門的研究は副業であつて決して主意ではない。或いは教授にしてこの副業を本業の如くに遣つて居るものもあろうが本来の大学学制の上から論ずる場合には學生を教育するのを第一の目的として居るのである。然るに伝染病研究所は從來の官制に明示せる如く内務大臣の管轄の下に在つて伝染病の病源を檢索し、これに対する予防撲滅の方法を講じ、進んで治療の方法を研究し、直にこれを衛生行政の機関として実地に應用するのが目的である。彼の血清を精製し痘苗を製造するのも如上の目的に外ならぬ。則ち精製せられたる血清は病氣の予防に用い或いはその治療に用い、痘苗は製造してこれを天然痘の予防に用いる。その他の予防液を製して各種伝染病の予防にこれを實地に應用せるが如き一國の衛生行政の機関となつて防疫の事務を學術と併行させてこれを敏活ならしめ一国内に於ける伝染病を成るべく少なくして、進んではその跡を絶たしむるのが伝染病研究所の目的とする処である。

前述の如く伝染病研究所が衛生行政の機関として遺憾なきを期せんとするには學術の研究を一日も忽せゆがにすること

は出来ないのである。例えば血清の製造にしてもその製造発見は今より二十五年前であるが二十五年後の今日に於ては同じ血清であっても昔日の製造法では学問の進歩が許さない。痘苗の製造も然り。予防液の製造もまた同じで年々歳々学問の進歩に従つて孜々として研究を積み改良を加えてゆかなければならぬのである。もしも伝染病研究所がこの研究を怠つて二十五年前に発見した血清の製造を今日まで保つて居るが如くんば、これは日本の伝染病の予防機関たり能わざるものと言ねばならぬのである。しかし伝染病研究所は幸いにその誇りを免かるだけの功績を積み、常に大奮闘的の學術研究を重ねて来たのである。この点が私の主唱と大學派の謂う処と議論の分かる処であるのだ。然るに当局者は伝染病研究所と云う名称のあるがために、即ち伝染病の研究する學術の府であるならばこれを大學に隸属するのが当然であると云う様に単純に考え、大學派の人々の考えは衛生行政を實地に應用するのにはその機関が必要であると云うことには一向目を着けないで学制統一呼ばわりをする。これほど矛盾したことはない。いやしくも伝染病研究所に足を踏み込んで我々のなしつつある事業の如何を一度觀た人は、伝染病研究所が内務省の衛生行政の機関として一日も欠くべからざるものであることは了解するのであるが、不幸にして当局の大臣はこれを知らず徒に名称に拘泥してこの妄断を敢えてせるは實に我が学問の神聖を潰したと云つても差支えないと思うのであるが、伝染病研究所と大學とでは研究の方針が全然相異なつて居る。例えばここに一伝染病患者があつた時にその患者の血液を検査しなければならぬとか或いは尿の検査、糞便の検査をしなければならぬと云う様に一患者に就いて種々の研究をしなければならぬ場合が沢山あるのであるが、如何に万能なる學者にしてもことごとく専門の學術知識を完備した學者はない。もし大學に然う云う學者があるならばそれは實に世界の珍宝であるが、それは在る筈もなし、又有り得べからざることであるから、各専門の學者が一所に手を揃えて有らゆる方面に差支えなく充分に検索しなければならぬ。伝染病研究所は年来かくの方針に拠つて研究して来たのである。然るに大學に於ては例えば内科外科或いは生理病理衛生医化学と云うが如く種々に学科が分れ、それに各担任の教授があり、学生を教育する傍らにそれぞれ専門的に研究して居るのであるけれども個々独立して居つて宛も群雄割拠の状を呈し、自分の領分内には他の人の一步も踏み入ることを許さないから、医化学者が或る病氣の尿の検査をしたいと思つても容易に尿は貰えない。或いは細菌學者が血液の検査をしたいと思つても血液が手に入らぬと云うように「自分のことは自分一人です」と

云うように各狭い領分の下に割拠して居るから、広くこれを研究に應用することが出来ない。従つて何等研究の成績が挙げないのである。伝染病研究所は夙にその弊害を一掃してヨーロッパ、殊にドイツのコッホ先生等の研究方針を参酌して一定の研究方針を立てたのである。その研究法はいわゆる綜合研究とでも名を附けたら適當であろうか、即ち我が伝染病研究所には病室を備へ患者を收容し、病理解剖学者細菌学者は元よりのこと下等動物プロトゾンの如きものの研究に迄専門の動物学者を置き、医化学者も置き、有らゆる総ての伝染病の研究に欠くべからざる各専門の学者を一堂の下に網羅して居るからここに一人の患者が入院すればその患者の受持なる内科の臨床的専門医が充分臨床上の研究をなすは言うまでもなく、血液の検査は動物学者に、尿や便の検査は細菌学者に、進んで尿の分析は医化学者に遣らせるようにして、一患者に就いても多くの専門学者が各方面から力を協せて研究するのであるから伝染病患者の研究は立ち所に完全に出来るが、その患者が不幸にして死亡せる場合には患者或いは家族の承諾を得れば直に解剖する。そのためには病理解剖学者が居つて互いに講究してその患者に就いての生前ならびに病気の経過を知悉することが出来るのである。これ即ち綜合研究の利益にして又実に今日の医科大学に見る能わざる伝染病研究所の特色である。而もこれは我が日本の伝染病研究所の特色のみに非ずして欧米各国の研究も同一方針を實行しつつあるのである。この綜合研究を創意して実地に行つたのはドイツのコッホ先生である。コッホ先生が七年前に日本に來られた時分に伝染病研究所には度々訪問されて研究所の組織ならびに所員一同の日常の活動を親しく目撃し、非常に称揚されてかくの如き研究の法は元來ドイツに於て自分の始めて遣つたことであるけれども自分の研究はここまで完備して居らぬ、何故ならば研究上の必要条件として大抵の事は具備して居るが自分の研究所では血清或いは痘苗を製造することは未だ遣つて居らぬ、しかし理想は是非共にここに達しなければならぬと考へて居つたのである。然るに今日本に來て図らずも我が多年の理想の実現せられて居るのを觀て衷心歎喜の情に堪えぬと言われた。これを以て見ても我が伝染病研究所の研究方針の完備して居ることを証するに足ると思う。今回の所管換えは現内閣の趣意に基いて学制を統一するのが主なる目的であると言われたが、しかしこれが又今日の學術進歩の趨勢に全然反して居る議論である。その所以は今日は欧米各国共に我が伝染病研究所と同種類のもの皆大学外に獨立して居るのである。例を挙げればドイツのコッホ研究所には年々國庫から六十万マルクを支出して居る。なおその上にドイツ聯邦の衛生院と

云うのがベルリンに在つてここにも研究部なるものを置いて伝染病及び衛生上に關する研究を學術的にドシドシ遣らせて居る。ドイツの學術の進歩はこれでも未だ満足することが出来ないがドイツ皇帝は御手許金を二百万マルク下賜せられ、その他富豪及び有志の贖金を併せ一千万マルク以上の資金を以て研究所を設立されカイゼル・ウィルヘルム研究所と命名され、今回の戦争前に開所式を行われ皇帝自ら親臨されて研究の方針ならびに該研究所設立の所以を演説された。即ちこの研究所は人間及び家畜の伝染病に關し科學の研究を大学外に獨立して遺憾なくなさしめんとするの思召しに因つて設けられたのである。その他フランクフルト（ドイツ）に於ては或る富豪が死去せるに當つて遺言して彼の有名なる六〇六号の発見者エールリッヒを聘して私立の研究所を建設し巨額の資本金を投じ伝染病の研究をなさせて居る。その研究所から我が秦博士が参加して研究製造せるサルヴァルサンの如きものが出て居るのである。かくの如くドイツ国内には全く大学と分離し、八研究所が政府或いは富豪の補助に因つて立つて居る。フランスにも有名なるパステルの研究所と云うのがある。これは世界に名を轟かしたパステル先生の建てた私立研究所であるが、フランス政府は二十万フラン以上の補助金を出して奨励し、これも大学外に獨立して伝染病その他の研究に従事して居る。イギリスには有名なるリスタアと云う人が居る。リスタアは石炭酸を防腐薬に用いることを發明し外科医学界に一大改革をした人——がその人のためにもやはりリスタア研究所を創立してリスタア先生亡後の今日もなお国庫が補助してリスタア研究所は伝染病を研究して医学に貢献して居るのである。アメリカでは彼の富豪ロックフェラーが数百万ドルの資を投じてニューヨークに伝染病の一大研究所を立て居る。ここに我が日本の野口英世なる人が働いて居るが、昨年来種々なる発見をして世界の医学界にその名を揚げつつある——この野口氏は伝染病研究所に数年在勤し招聘されて彼の地に往つた——のでかくの如く幾多の有為なる人が出て有益なる発見の公表さるるのも畢竟獨立の研究所を設けて互いに切磋琢磨させて居る結果である。このロックフェラーの研究所は大学と何等の關係もないのである。その外アメリカにはこれに似た獨立の研究所は沢山ある。これ等の例に徴して見ても世界に於ける医学研究の趨勢が、医学の研究を大学の上に依頼して置いては著しい進歩を見ることが出来ないと云う議論を是として居ることが解るであらうと思う。

欧米各国の医学はかくの如き状況を以て駸々乎としてその進歩を計つて居るので、二十世紀の今日にあつてなお昔

の如く大学万能主義を以て医学の進歩を計ろうと夢みるものはないのである。この際に當って独り我が日本がただわずかに一つのみなる国立の伝染病研究所を殊更に大学に隸属すると云うのはまことに世界の学術研究の趨勢に背反した処置であると云うより外はない。然らば財政上の関係は如何と云うに、これまた決して政府に厄介は掛けて居らない。前年度の如きは国庫から二十万円の歳出はあったが二十三万五千円は再び国庫に返納して居る。今仮りにこれを貸借上の一関係として見ても二十万円の元金を返して三万五千円（一割五分以上）の利子を払って居るのである。今日一割五分以上の利子は決して安い利子でない。即ち国庫は伝染病研究所の現在から少しの損失も招いては居らないので財政整理上大蔵省は我が伝染病研究所に向って何等の苦痛をも感じて居らぬと云うことは我々の堅く信じて疑わぬ所である。かく論じ詰むれば行政整理のために学制を統一すると云う茫乎たる名義の下に我が学問研究の方針まで破壊され、而かも研究の方法甚だその意を得ざる大学に身を投ずると云うことは学者の立場として到底出来難いことであるから断然この際は辞職をして何処までも我が学問の神聖を保たんとする所以であるので、決して一時の感情に駆られた訳ではない。しかしながらこれをしも一場の感情と言ふものがあるならばそれも言う人の心に任せて置こう。人間に血あり涙ある以上かくの如き感情は時に當って当事者の心に起るべきものであると思うから……にもかくにも私は今世の毀誉褒貶を顧みるの違なく自ら信ずる処を断々乎として実行したのである。しかしながら既往二十有余年辛苦經營して建てた所の研究所Ⅱ我城Ⅱを突如として他人に明かすに就いては無量の感慨を禁ずる能わざる次第で、秋雨蕭条風冷なる兩三日前所員にも建物にも告別の情を叙して今は全く関係を絶つたのである。そもそも伝染病研究所が今日あるに至れる二十年間の歴史には色々なことがあるがなかならず想い起さるるのは学問に対する故福沢先生の熱心と同情とである。ここに少しく伝染病研究所創立の由来を述べて見よう。私がドイツに留学して帰朝したのは明治二十五年であった。私は彼の地に留学して学び得たる処を以て単身伝染病研究の事業に着手したいと熱心に考えたが自分に資力はなし、且つ周囲の事情もすこぶる冷淡であつて誰一人相手にしてくれないと云うような有様で、いわゆる心は矢竹に逸れども如何とも仕様がなかつたのである。或る時故長与専齋翁は福沢先生にその話をされた処が先生は非常に同情を寄せられて、それでは一つ奮発して自分の資産の幾分を抛ち助けて遣らせようと云うことを言われ、先生の所有地芝公園第五号地の一つの建物を新築して下すつて取り敢えずここで始めよと奨励

され、明治二十五年十月に工を起したのであるが、先生のことだから急ぎに急がれて十一月の下旬にはほぼ落成したので、今日芝御成門を通る人は御成門の左手に些細かな西洋館の在るのを見るであろう。それは福沢先生が一北里のために資力を抛って造って下さった家である。さて家は出来た、費用も出来るだけは先生が助けて下さると云う思召しで早々事業に着手したのである。森村市左右衛門翁もまたこの事を福沢先生から聞かれ一臂の力を藉かそうと言われ諸器械を買い求むる費用を送られ、ようやく事業の端緒を啓いたのである。

この時に於て私立衛生会もまた伝染病研究の事を思いたった。一体私は当時衛生会の審事員であった。そのみならずドイツ留学中同会を経て長くも帝室より恩資金二なお一ヶ年伝染病治療の研究を継続せよとの思召にて二を拝受した等の縁故のあるために同会に於ても研究所を起して聖恩の万分の一に報い奉るの意に出たのである。そこで私立衛生会はその時の副会頭たる長与専齋翁を通じて福沢先生に研究の費用は衛生会から一ヶ年三千六百円ずつ支出しすから先生の建てられた家屋と土地をそのまま衛生会に貸して下さいと御依頼に及んだ。処が福沢先生は快くそれを承諾されて、家屋と土地は一切無料で使用して差支えないと云うことになり、ここに於て北里のために造られた研究所と云うことになったのである。従って私は私立衛生会の委託と云う名義になって明治二十五年十一月の三十日を以ていよいよ伝染病研究所なるものを開いた。且つ福沢先生ならびに森村翁の義拳に抛り私立衛生会が中心となって伝染病研究の事業を開始することになったと云うことが世の中に知れ渡ったので内外の有志から金品を贈られ多大の同情をも寄せらるるようになった。かくて研究の進むに従い病室を造って病人を收容する必要を感じるようになったが、前述先生より恩借の所有地に病室を設けることはむづかしく、殊に場所も狭い。因って翌明治二十六年一月に私立衛生会から芝愛宕町二丁目内務省用地の貸下げ方を東京府知事に願ひ出で翌日聴届けられ土地を使用しても宜いと云うことになったので、同月十六日衆議院議員長谷川泰、島田三郎、大岡育造、古莊嘉門、柴四郎、鈴木重遠、鈴木万次郎、高田早苗の諸氏は同議員箕浦勝人外百七十五名の賛成を得て衆議院に左の如き建議案を提出したのである。

大日本私立衛生会設立伝染病研究所補助費に付建議伝染病の社会を荼毒とくどくする至惨たひななり乃ち之を驅除するの方法を講ずるは人生を保護し国利を増進するの大計にして之が研究を力むるは国家生存上殊に必要欠くべからざるものとす曩に大日本私立衛生会は伝染病研究所を設立し現に勲三等医学博士北里柴三郎をして之を担任せしめわずかに研

究事業の端緒を啓発することを得たりと雖も其規模狭小にして充分研究其の結果を得難きが故に国庫より創立費補助として金若干円經常費補助として向ふ三ヶ年間々々金若干円を右大日本私立衛生会設立伝染病研究所に補助相成度右及建議候也

右衆議院規則第八十六条に由り提出候也

該建議案は二月二十三日議會に於て可決、即日政府に建議せられたのであるが政府はこれを容れ二月二十五日補助に関する追加予算を提出、直に貴衆兩院を通過して三月六日附を以て公布されたのである。而して三月十三日に内務大臣より左の命令書を大日本私立衛生会に交附せられた。

大日本私立衛生会、其会設立の伝染病研究所に対し創立費補助として金貳万円を明治二十六年度に於て下附し研究所費補助として明治二十六年度より明治二十八年度まで三ヶ年間毎年金一万五千元を下附す依て補助年限内其会は左に掲ぐる命令書の趣旨を遵守すべし

明治二十六年三月十三日

内務大臣伯爵 井上 馨

命令書

第一、伝染病研究所は各伝染病の原因及予防治法を研究し国家衛生法の審事機関たることを力むべし

第二、伝染病研究の事業は総て医学博士北里柴三郎の指揮に任ずべし

第三、伝染病研究所の規則は其会に於てこれを定め内務大臣の認可を受くべし

第四、補助金は伝染病研究所創立費及伝染病研究所費の外に支消することを許さず「伝染病研究所創立費及伝染病研究費は毎年三月一日までに翌年度の予算を定め内務大臣の認可を受くべし」予算科目の更正流用を要するとき
は内務大臣の認可を受くべし

第五、伝染病研究所の事業及び出納は内務省衛生局長をして監督せしめ時々検査を為さしむることあるべし

第六、伝染病研究所の事業及び出納は毎年度経過後二ヶ月以内に於て内務省に報告すべし

第七、伝染病研究所の出納は会計検査院定むる所の規定に従い同院の検査を受くるものとす

第八、本命令書に違反したるときは補助金の下附を停止し且つ其支出残額を返納せしむることあるべし

第九、本命令書第二に變動あるときもしくは研究の目的を達し得ざると認むるときは補助金の下附を停止すべし

ここに於てか伝染病研究所は始めて政府の補助を得るに至り規模の拡張と共に功績を挙げん事を大いに期したのであつた。

内務省より貸下げられた愛宕町の地所に研究所附属病室を建築せんとするに当り端なくも芝区民の一部に故障が出来て往再数月を費すに至つたが、これ畢竟その当時に於ける双方の意思が疏通しなかつたのであるからここにはその顛末を詳述するのを省く。但し芝区民も後には研究所の必要なることを認識して多大の同情を寄せられたのである。かくの如き事情のため予定より遅れてようやくその年の秋九月東京府知事より建築の許可を得たるを以てひたすら工事を急ぎ、翌二十七年二月七日竣成、総ての設備も整頓したるを以て同八日福沢先生より借用した芝公園の研究所より移転、同十七日より新築家屋に於て作業に着手し先生へ私立衛生会から厚く御礼を申上げて借用の土地家屋を返上したのであつて、翌二十八年に至り前号既述の衆議院の建議に成つて国庫の補助が將に尽きんとしたので再び衆議院議員諸氏が建議案を提出されてなお又三ヶ年間年々一万五千円の補助を受くることになつたのである。この間研究所の事業は幸いにして年と共に益々発展して明治二十六年末にはジフテリア血清、破傷風血清を製造してこれを一般の患者に応用させることになつた。然るに明治二十九年に至り政府はかくの如き事業は国家的の事業であるからさきに痘苗の製造を政府の有とした様に血清の製造も政府の事業とするのが至当であると云うので血清の製造を政府の事業として取り上げ、芝公園内に血清薬院なるものを設け、私を顧問としてこれに従事させたのである。ここで研究の當時に於ける立場を少し言わなければならぬ。則ち研究所は私立であつて年に一万五千円の国庫の補助を貰つて居る。而して研究所で発明した処の大切な生産物は国家事業と云う名目の下に取り上げられて仕舞つたのである。もう少し詳しく言うと研究所は一万五千円の補助を以て研究費に宛つるより外に費用の出所はないと云うような訳であつた処が、それだけでは研究が捗々しく往かぬので明治三十二年に至り伝染病研究所も国立に改められたのである。その理由は伝染病研究所で研究した所の結果を以て国家的の事業にしたのであるから、従つてそれを産み出す所の研究所も国家的の物でなければならぬと云う議論であつた。その時に私はこの議論の可否に就いて福沢先生の許に御相談に

出て先生の御意見を承わって、先生の御言葉は如何にも国家的の事業に違いないから政府が造りたいと云うならば遣らせたら宜いではないか、政府の事業にして君に遣らせぬと云うならば別だが君に総ての事を任せ、そうして国家が充分に金を出してくれると云うならば事業の発展上これ程結構なことはない、断行し給えと被仰た。そこで私も意を決して衆議に従い国立伝染病研究所に改めることに努めた。国立となったに就いては血清や痘苗も研究所内で製造することが出来るようになった。そこで当然の結果として痘苗製造所及び血清薬院も廃合されて伝染病研究所内一つになったのである。かくして研究所の規模は拡大され着々研究に従事し、研究所員は四方から人材を集め得るようになり、傍ら開業医その他の医師に伝染病研究の方針ならびに治療の講習をさせるまでに進んで来たため在来の愛宕町の建物は狭隘を告ぐるようになったので、遂に明治三十五年芝白金台町に二万余坪の地所を買入れ一大事業を起したが、現在の伝染病研究所である研究所の由来はかくの如くで始めは純粹の私立であつて福沢先生の庇護に因つて成立ち、繼いで私立衛生会の有となり国庫の補助を仰いで居つた。続いて国家的事業と認められて官立となった伝染病の子防撲滅進んではこれを治療に応用する方法を充分に研究して国家衛生の機関とせねばならぬと云うことは独り我が国の衛生局に於けるばかりでなく、欧米各国共に衛生局もしくは衛生院の在る処では必ず伝染病研究所もしくは衛生試験所と云うものが附属して充分に研究して国家衛生行政の機関となつて居るので、伝染病研究所は決して我が国特有のものではないのである。然るに今不幸にして内務省より文部省に移さるるに至つたのは何の点から論じても実に世界の輿論に反したことである。試みに思へ、その昔伝染病研究所の功績着々と挙り政府がこれを国家的事業に仕よつた際にもし私がこれを肯ぜずして何処までも私立にして置くこと主張したならば世人はこれを何と言つたであろうか。北里は利己主義で国家を思わない怪しからん奴であると攻撃したのである。而して明治三十二年より大正三年まで及ばずながら努力尽瘁した事業は学制統一或いは行政整理の名の下に一言の相談にも及ばれずして所管を換えられた次第は前段に縷々述べた通りである。今にしてこれを言うは宛も死児の歳を数うるに似たりといえどもまた親の情として諒恕せられんことを冀うものである。

(細菌学雑誌、第二三九号、八五四―八六四頁)

SAVING
Shoshin.com

陳情書

一九一四・大正三年

去る明治二十五年ドイツ国より帰朝するやいささか研修する所を以て微力を国家に致さんと欲したるも適くに処なく止むなく単独先ず伝染病研究の事業に着手せんとする時、福沢諭吉氏これを聞きて大いにこの拳を壮とし、新たに一家屋を築き、以て作業の場所に供せられ森村市左衛門氏等また器械費その他に充つるため金品を寄附し、以てその事業に補助せらる。次で貴大日本私立衛生会に於て伝染病研究所を創立せらるるに方り、時の副会頭長与専齋氏は更めて不肖に委託するに同会伝染病研究の事を以てせらる。翌二十六年衆議院議員長谷川泰外数氏の建議に基き国庫より研究所創立費及び研究費補助の交付あるに及び、井上内務大臣また伝染病研究の事を挙て不肖の指揮に任せられたるは同大臣の貴私立衛生会に下されたる命令書中に記載する所の如し。これ当時我が邦の学制学風は輓近の医学衛生学の研究方法と相副わざるのみならず国民生活の競争に資すべき衛生行政の審事機関未だ全く備わらざるを以て、不肖をして一個私業としてこれ等弊竇以外に奮起する所あらしめんとせられたるに外ならざるべく、不肖また上は帝室ならび政府より、下は在野篤学憂世の士より直接間接に与えられたる高情と自己の使命とに対し報効を図らんことを期したるを以て、謹みてその任に膺り専心斯業の成果を挙ぐるに汲々とし、血清製造の如きまた始めてその端を啓くを得たりき。その後三十二年三月に迨び廟議これを国立となすに改定せらるるや貴私立衛生会に於て政府の内に遵い不肖の決意に聴き研究所在来の家屋備品全部を挙げて政府に寄納せらるるに至りたる、畢竟貴私立衛生会がその財産ならび権利を棄つるもなお且つ不肖の事業を賛翼奨励せしめんとする主旨に出られたるものにして、不肖はこれに想到する毎にその庇護の深厚なるに感激せずばあらず。爾来不肖は内務大臣の指揮監督の下にありて倍々斯業の研鑽発達に努め、造次顛沛貴私立衛生会経営当時の趣旨を遺忘せず拮据營々今日に及びたるに、図らざりき頃者廟議突然これを内務省所管より文部省所管に移さることあらんとは、けだしこの事たる一見単に政治機関の所管転換に過ぎざるが如くなるも、終にこれが事業に及ぼす影響の至大なる実に意想の外にあるべく、既に一木文部大臣

の不肖に口示せられたる所に拠るも同省は近くこれを医科大学に隸属せしめ、その内部を全然同大学の組織に変更せしめらるる予定なるが如し。これ実に不肖が多年主持し来たりたる研究方針を根底より破壊し、併せて伝染病研究所設立の趣旨を一朝に滅却するものにして、理に於ても情に於ても不肖の堪え得べき所にあらず。嗚呼、政府の不肖に對する前に慇懃にして後に冷酷なる、何ぞかくの如く甚しき。但これ等の事不肖の深く意に介する所にあらずといえども、而かも伝染病研究所事業の性質たる、これを内務所管に置きて専ら衛生行政の審事機関たらしめてこそその本領を發揮し得べけれ。これを学芸の府に隸属せしむるに於て到底完全にその目的を遂行する能わざる、火を賭るよりも明かなり。これを以て不肖は自家の研究方針を抛ち自家の所信を枉げて官職に安んずるに忍びず、仍て断然伝染病研究所長の職を辞し、今後は二十余年前の当時に復り単身独力更に伝染病研究の事業を起して貴私立衛生会及び当年篤志諸士の盛意に酬答する所あらんと欲す。顧みれば不肖の貴私立衛生会に覆う所甚だ多し。ここにこの光輝ある伝染病研究所を去るに臨み、敢えて閣下にこの書を呈して一身の処置誠に止むを得ざるものある所以を開陳す。仰ぎ冀くは閣下不肖の微衷を諒とせられ便宜これを貴私立衛生会の役員及び會員各位に伝達して不肖の鄙衷を明かにせられんことを敬て白す。

大正三年十月三十日

医学博士 北里柴三郎

大日本私立衛生会会頭伯爵土方久元閣下

(原文片仮名)

(細菌学雑誌、第二二九号、八七二―八七四頁)

SAMPLE
Shoshi-Shim.com

挨拶 伝染病研究所全所員に対する告別

一九一四・大正三年

研究所は去る十四日突然移管された。而して東京帝国大学医科に附属して各科に分割される筈である。かくの如きは能く諸君の知れる如く、余が多年の主義たる綜合研究と相容れざるもので、今更これに向って多く言を要しない。余は二十年來諸君の奮闘努力に依り、力を尽して伝染病の研究を遂げ、国家に対して報恩の万分を捧げ来たったが、今やこの世界の氣勢に逆行し、研究班存立の意義を破壊する政府の措置に遭い、ここに研究所を去らざるを得ざるに至ったのは、情に於てはまことに忍び難きものもあるも、公人として又学徒として、確く抱ける主義信念に反く能わざるを諒とせられたい。余は昨日断然職を退いた。しかしながら諸君はなお春秋に富む。有為なる前途を謬らざらんがために、進退の事は宜しく慎重に考慮し、一路研学以て邦家のため又学問のためいよいよ奮励せられん事を望む次第である。

（北里柴三郎伝、岩波書店、東京、八四頁）

SAMPLE
Shoshi-Shinshu.com

北里研究所設立趣旨書

一九一四・大正三年

不肖さきに伝染病研究所長の職を辞し新たに私立研究所を設立せんとするに当りいさか希望を開陳して江湖有識の土に訴うる所あらんとす。

十九世紀の医学界に於て精華を極めたるものは微生物学なり。ローベルト・コッホ先生が朧めてその基礎を植えてより伝染病の治療予防及び撲滅の研究に心血を注ぎしこと四十余年、先生の一生は国民利福の錦繡を以て飾らるるに至れり。不肖嘗て親しく先生に師事せること七年、明治二十五年先生の学風をもたらして帰朝するや福沢諭吉氏、森村市左衛門氏等の声援と幫助とを得て先ずその研究を開始し、次で大日本私立衛生会の伝染病研究所を創立するに当り同会の委託を受けてこれが事業を管理し、直ちにジフテリア血清及び破傷風血清の製造に着手してこれを治療上に応用したり。血清療法が我が邦とドイツとに於て東西相呼応して治療学上の一新紀元を画し得たるは実にこの時に在りき。同二十六年衆議院議員長谷川泰外数氏の建議に基き国庫より研究所設立費及び研究費の補助を受けたる以来内務大臣の指揮監督の下にその業を伸張し、同三十二年進んで国立研究所となり、同三十八年血清薬院及び痘苗製造所を合して更に大規模の研究所となりたるは世に周知せられたる所の如し。

顧みれば不肖自ら揣らず微生物学を我が邦に移植してより伝染病の病原及び治療予防の方法を考究するに心神を傾倒し、なかなしく結核治療法の研究は不肖終生の事業として奮励一日も止まざる所なり。ジフテリア血清は靈妙なる効果を奏し、而かも欧米の製品に比し遙かに優秀なるものを得るに至りしは不肖のひそかに誇りとする所なり。赤痢病原の発見、痘苗製造方法の改良、飯匙蛇毒血清の応用、黴毒のサルヴァルサン療法等は皆不肖の主管理せる伝染病研究所の直接間接に成功したるものなり。その他、ペスト、恙虫病、脚氣、吸虫病等を始め諸種の血清療法及び予防接種法等に於て研究したる所甚だ少なからず、かくの如くにして当初以来上 皇室の鴻恩に酬い奉り国家の進運に貢献し、併せて斯学の發達進歩を計らんがため拮据經營ここに二十余年、一朝凶らず廟議の変改に遭いその所管を内務省より

文部省に移さるるに及び、終に日夕愛棲（愛憐か）し来たりたる作業室を棄て伝染病研究所長の職を辞するの止むを得ざるに至りたるは、不肖終生の憾として遂に忘るる能わざる所なり。

但それ近時学問の趨勢は一日の安を偷むを許さず列国競争の間に立ちて斯学の発達を図り国運の隆盛を計らんとせば瞬時も廢する能わず、仍て不肖はここに奮然起ちて新たに私立の研究所を興しその研鑽を継続せんとす。けだしこれ等研究機関の独立は時勢の要求する所にして、彼のパステール、コッホ、リスター、エールリッヒ、ロックフェラー研究所の世界に重きをなす所以及び近時ウィルヘルム皇帝学院、カーネギー学院等の設立を見たる所以またここに存し、不肖等の事業が教育の府と何等の關係無く専心一意これに没頭せざるべからざるを教示するものなり。不肖豈に奮勵一番せざるべけんや。加うるに今や不肖の旧僚友助手十数名は聯袂辭職、来たりて不肖に協力せんことを誓えり。因りて不肖はその企図を永遠にし基礎を鞏固にせんがためその組織を社団となすこととせり。かくの如くして始めて学問の独立と權威とを維持し、以て不肖の素志を確實に貫徹するを得んか。ここにいささか所信と希望とを披瀝して北里研究所設立の趣旨を開陳することを爾り。

大正三年十二月

医学博士 北里柴三郎

〔原文片仮名〕

（細菌学雑誌、第二三〇号、巻頭。大日本私立衛生会雑誌、第三八〇号、七六三―七六六頁）

SAMPLE
Shoshi-Shi.com

挨拶 北里研究所設立披露

一九一四・大正三年

伝染病研究所の所管変更に際し吾人一同聯袂職を辞するに至りたるは万止むを得ざる所にして、今更これを繰返すの要を見ず。然り而して余及び余の同僚は元より益々進んで斯学のために尽瘁せんとする覚悟なれば、新たに私立研究所を設立して以て素志を貫徹し邦家のために尽す所あらんとす。これ吾人の使命を全うする所以と信ず。

今回設立の研究所は同志同僚の希望に由りて研究所の歴史に鑑み余の名を冠して北里研究所と名づくることとせり。然り而して今回伝染病の三字を削りて単に北里研究所と名づくるに至りし所以は、思うに医学に於ける実験的研究はことごとく細菌学者の手に由りて成れると云うも過言にあらず。血清及びワクチン療法の外、例えば化学的療法の如き、組織培養の如き、皆細菌学者の創意研究したるものなり。その他寄生虫学は広義の伝染病に算するを得べきも、伝染病なりや否や不明のもの、例えば脚気、ペラグラ、壊血病、首下り、骨軟化症等は皆吾人の研究すべき材料なり。北里研究所に於ける研究方針は官立伝染病研究所に於て採り来たりたる方針を踏襲し総合的研究をなすことは勿論、なお進んで益々その範囲を拡張すべし。

官立伝染病研究所に在りてはその事業範囲に自ら一定の制限ありて多少束縛を免れざれども、私立研究所にありては研究問題中特に急要と認むるものあるときは全力をこの問題に集中するが如き機宜の処置を取り得るの自由あり。

研究室内に於ける研究の外、近年欧米に於ける研究所に於ては研究隊を派遣して広く各地に向うて活動しつつあり。而して少なくとも東洋に於ける伝染病の研究は我が日本の使命なり。いわんや我が領土は台湾、朝鮮、満洲に及び、更にその勢力は支那及び南洋に伸びたり。我が研究所は資金の許す限りは適宜研究隊を派遣して広く研究に従事せしむべし。

北里研究所の組織は社団となし、遠からず法人となすの基礎を作り居れり。而して寄附金はことごとく基金となし、以て永遠にその厚意に酬いんとす。

SAMPLESHO.com

然れども研究事業は少額の資金によりてその目的を達すべきにあらず。吾人の研究は永遠に互りて一日も忽かたがせにすべからず。即ち諸種の血清、ワクシン類及び痘苗の製造販売を行い、以て研究の費用に供せんとす。而して血清は余及び同僚がこれを創始しこれを発達せしめたるものにして、規定に従うて既にその製造の許可を得たり。

吾人ここに新たに設置せんとする私立研究所の組織及び研究方針を披瀝するに当り、諸君の吾人に与えられたる御同情を謝し併せて今後益々御援助を給らんことを希望す。

(細菌学雑誌、第二三〇号、九四九―九五〇頁)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

開所の辞

一九一五・大正四年

閣下ならびに諸君、本日は恰も故恩師コッホ先生の七十二回の誕辰に当りますので御座います。この日を卜しまして我が北里研究所の開所式を行うに当りまして、閣下ならびに諸君の御貴臨ひつりんを忝かたじけなくしましたのは私の最も光榮として深く感謝する処であります。昨年十一月に冠を掛けまして、隠退しました時分には、私ももう大分年を取りましたからして、世の中を引きました余生を風月の間に送りましようとは考えましたので御座います。然るに凶らざりき、私の同学の士等はことごとく官を辞して参りまして、切に私の再び奮励して斯学のために働くようにと勧めました。こう云う様な同志の人々の切なる勧めがある上、又一面には今日世界の大勢が吾々の儉安を決して許す時でないと考えまして御座います。何故かなれば科学の叢淵を以て称せられ殊に医学の方に於きましては、吾々の最も敬愛する所のドイツ国を始めとして、イギリス、フランス、オーストリア、ロシア、イタリヤの諸国は今日戦乱の巷と化しまして、これ等の国々の学者には全く学問の研究と云うことに従事する違いとが御座いませぬ。或いは戦争に従事し或いは戦争に關した仕事をすると云う様なことで晏然として学問の研究と云うことに従事することの出来ませぬのは、誠に歎かわしい次第で御座いますが、これ又致し方のない場合と考えます。この間に於きまして、科学の進歩のために働いて世界人類の幸福を増進し得る者は、単り北米合衆国と我が大日本帝国のみで御座います。かくの如く我が同志の熱心と、世界の趨勢とに感動致しまして、再び私は立ちまして、この新研究所を起すと云う気になりました、そうして斯道のために奮励せんと決心致しました次第で御座います。その規模はもとより私等一人の微力の働きの御座いませぬからとて大規模の事は出来ませぬ。現に皆さんのここにお集まり下すって居られる処の敷地の面積はわずかに二千五百余坪、今日御覽下された建物の坪数は七百七十坪余御座います。その外郡部の荏原郡に一飼畜部を設けて御座いますがこの面積は、馬とか牛とか云う大きな動物を飼か置かなければならぬから、土地を少し広くとりまして、四千三百五十坪の面積が御座います。ここに建てて在る作業室及び畜舎の建坪は三百七十坪でありまして、そうしてこ

ここで血清製造を致します次第で御座います。かくの如き微々たる研究所を建てました訳で御座いますけれども、私の考えでは、これによりて能く本邦の學術の精華を發揮しまして、上は皇恩の万分の一に報い奉り、下は國民の發展に資し、進んでは世界人類の幸福、利益を増すことの出来ることと固く信じております次第で御座います。で当所の事業と云うものはもとより私が従来採り来たりました所の微生物學の研究が主で御座います。けだし我が微生物學の發達に就きましては種々なる自然科学の力に負う所が非常に多いので御座います。それと同時に又その研究を申しますれば先ず第一に免疫の事、化学、病理學、藥物學等に涉りまして實驗治療學に立入ったので御座います。更に又一方には衛生學を拓きまして、公衆衛生、防疫の實務にも入りまして、そうしてこれ迄私等同志の者は、これ等の事業に従事しておりましたからして、或いはこれ迄の事業も國家人生のために益したことがあるうと信じております。かくの如く現代の微生物と云うものは最も實驗的研究に由つて醫學全般の基礎を作つて居る次第で御座います。諸君の御承知あらせらるる通りに醫學と云うものは今日迄に種々なる分科に別れまして、余り分科が別れ過ぎるほど別れまして御座いますが、今日ではそれが又再びそれを綜合しまして、各々分科で研究した所のものを綜合しまして、一大研究を完成すると云う、こう云うことが、今日の吾々の微生物學に對する所の理想で、又是非實際にこれをやらねばならぬことと考えます。それで現代科學の研究と云うものは各科が別々に、これ迄通りに孤立して、そうして障壁をその間に設けると云うことは今日では許しませぬ。一科の進歩と云うものは他科の發達を促がすものでありまして、相助け合いそれで甫めて人類の福利を増進することが出来るものであります。それで当研究所の事業もその發展に伴い、独り醫學或いは衛生上のみならず、他の領域迄進入しまして、恰度仏國のバーストール研究所に倣ひまして、農業、水産、工業その他に迄も我が微生物の研究を應用して國家、社會に貢獻したい考えであります。吾々同人は、如何しても進んで吾々の研究所を右申した位置に達せんことを切に希望して居る次第であります。かくの如き次第でありますからして、当研究所の主腦と云うものは研究部で御座います。その研究部の中には細菌學科、動物學科（醫學上の動物學科）、病理學科、血清學科、醫化學科、化學療法科、結核科、獸疫科、これ等の科を設けまして、そうして諸般の研究を遂げんことを期して居る次第で御座います。又一方臨床部に於きましては、吾々が研究して得た処の、研究の成績を實地上に應用しまするし、又一方講習部に於きましては、微生物に關する處の知識の普及、及び發達を

図りまして、一般に即ち全国の有志の同業者の方に御教示申す考えであります。又検査部と云うものを設けておりまして、種々なる病的材料や特殊の治療予防及び消毒材料などの検査を行うので御座います。なお製造部を設けまして、ここでは血清ワクシン及び特殊治療剤を製造致しまして普く世の需用に応じ、これを供給しまして公衆衛生上の施政を翼賛せんとする希望で御座います。これ等の事業を十分行わんとするには不肖なる私が所長の任に当りまして副所長、部長、副部長、正助手、副助手及びその他の職員を置きまして各その任に当らせる積りであります。当所設立のことを世の中に発表致しましたのは恰度昨年十二月でありましたが、その際に当りまして、我が同窓諸君はこの研究所の後援会と云うものを組織されまして、そうして資金を募られまして、私共の事業を大いに助けると云うこととの御協議がありました。千八十八名の同窓者諸君より四万八千八百八十二円五十銭の醸金が出来まして御座います。その他同窓以外の篤志家の諸君の数が九十九名ありまして、その寄附金が四千五百八十五円、合して五万二千七百六十七円五十銭と云うものを当研究所に寄附せられました。この寄附をせられた諸君の御厚意に対しては、我が研究所の職員はもとよりの事、私は非常に有難い御同情を感謝します。そうしてこれを当研究所の基本金と致しまして、手を付けませんで永遠に保存致しまして、御同情諸君の御厚意を長く伝えようと致します次第で御座います。で当所はただ今唯北里研究所と云う名目の下に成り立っておりますが、他日はこれを法人として一層基礎を固くしようと思っております。当研究所を起しました所の動機及び当所の事業計画等の大要は唯今申し上げました様な次第であります。如何なる学者が、如何なる学術上の研究を致し世の中にこれを公に致ししても、その研究の成績と云うものは實際上にこれを利用することが出来ませねば、人生に何等の効果を及ぼすことは出来ない次第であります。それでこれを利用するの多少と云うものは、一に社会一般の人士の科学に対する興味の深淺に由ること御座います。それで私はここに我が同志の人と結束致しまして、益々奮闘努力して国家ならびに人道のために力のあらん限りを尽さんと云うのであります。冀くは閣下ならびに諸君、私等の微衷を御諒察下すつて、深き御興味と御同情とを以つて益々多大の御声援を賜わりますなれば、私等は益々学術上の研究をとげその目的を貫徹することが出来ようと信じます次第で御座います。いささか所感と希望とを陳べまして開所の辞と致します。

(細菌学雑誌、第二四三号附録、二六二―二六五頁。大日本私立衛生会雑誌、第二九二号、七六八―七七〇頁)

演説 学問の神聖と独立 (福沢先生記念会)

一九一五・大正四年

私は福沢先生の記念日に当りまして諸君に御話を致しますことはこれで二度目でございます。本日再び鎌田塾長より御招ぎに預り、且つ何か演説をするようにと云う御話でありました。これには多少の意味のあることであろうと思っておりますので、不肖をも顧みずこの演壇に立ちまして暫時諸君の御清聴を煩わします。

私は慶応義塾出身の者ではありません。しかしながら福沢先生の御恩を受けましたことに於ては、慶応義塾出身の多くの方よりも、より多くを受けた一人でございます。実質的の御恩は素よりのこと、精神的教訓をも受けて居るのでございます。唯今鹿子木君より福沢先生の独立自尊、或いは独立不羈と云うことに就いて、先生が御存命中の御教訓を縷々御述べになりましたのでありますが、この独立不羈の精神と云うことに就いては、私は福沢先生に負う所が甚だ大であります。顧みますれば今から二十一年前のことでもあります。私がヨーロッパから帰りまして、多少修得致しました所の学術を、実地に応用しようと思いましたが、何分経験もなく実力もなき一介の貧書生に過ぎなかつたので、如何しようと手を拱して居りました際に、福沢先生ならびに森村翁の御助力に依り、私のいささか学び得ましたる学術の研究を進むるの途を開くに至りました。その歴史のことに就きましては、諸君は既に御存じのことと思えますから略しますが、先般来問題となりました伝染病研究所のことに就きまして、初め先生の御保護に依って私が独立した私立の研究所を起してやって居ります中に、政府がこれに補助を与え、なお進んでこれを国立にしよう、即ち政府の事業にしようとするやと云う交渉を受けました。そこで私は直ぐに先生の所に参りましてその顛末を述べ、如何したものでありましようかと言って御相談を致しました。すると先生はしばらく御考えになつて居らっしゃいました。政府がそう云うならばそうやたら宜かろうと、こう云う御言葉であつた。そこで私は押返して、先生の子弟の御注意と云うものは、いわゆる独立不羈で、余り政府などの厄介にならずに事をすると云う風であると心得て居りました。然るに私のこの事業を政府の言う通りにして、政府の事業としてやっても宜いと仰しゃるるのは、子ての先生の

御持論とは少し違つては居ませぬかと申上げました所、先生は、いやそうじゃない、と云うのはそれは政府のやり様次第のことである、所がこれに就いて政府は君に向つて何と言つた、即ちこの伝染病研究所の事業は一に北里柴三郎の指揮監督に属さしむると、こう云う政府からの交渉ではないか、政府がそれだけ君を信頼し、君の思うままにやらせると云うことであるから、その通りにして宜いではないか、何も必ずしも政府のやることごとく悪いと云うのではない、政府がその人を信頼し、その人に任せてやると云うのなら、その通りにして、一向差支えない、それでよしどし御やりなさいと、こう云う御言葉でありましたから、成程御尤もです、それならその通りに決心してやりましょうと申して帰りました。すると両三日経てから先生の所から私にちよいと来いと云う御使いがあつたので、早速参りますと先生は、どうだあの通りに決心したかと云う御話、そうです、先生からの御言葉もありましたから、その通りに決心致しました、即ち政府が私を信頼し、総て私の思う通りにやらせると云う政府の言質を取りましたから、いよいよやることに決心致しましたと申しました所が、そうか、それはそれで宜いが、それならここに一つ君に言つて置くことがある、一体人間は足許の明るい中に金が溜まるなら溜めて御置きなさい、今日は政府が君に信頼して居つても、又何時気変りをして、どんな事になるかも知れぬから、決して油断せず、足許の明るい中に溜められるだけ溜めて御置きなさいと、こう云うことを仰しゃいました。そこでハテナと私もその時思いましたが、今から思い合せると、実に先生の先見の明に感じた次第でございます。その時に先生がなほ仰しゃいますのに、学者が学問のことを研究するのには、一心にその事をやらなければならぬ、然るに一方に出来るだけの蓄財をせよなどと云うのは無理の注文である、であるから君はその方には直接に關係せずとも宜い、君は専心君の研究を進めるが宜い、その代りに金銭のことは自分の眼鏡で、この人間ならば間違いない泥棒も何もしない、君の手足となつて十分にやり得るだけの人間を君に貸せるから、その方の事はその者に委せたら宜かろうと言つて、私に一人の人を御貸し下さいました。それは則ち私が今日も一緒にやつて居ります田端重晟氏であります。で此方が明治二十六年以来私の事業の事務会計の事に当られ、今日までずっと続いてやつて居られる次第であります。

然るに不幸にして先生の先見の明が当りました、昨年に至つて例の研究所移管問題が起りました。この事も私から管々しく申上ぐる必要はありません、この時に当りまして私は私の学問と主義方針を異にして居る所に居つては、と

でも自分の学問の研究をこれから先き進むことは出来ないから、それなら断わると、こう云うことで私は政府の、即ち官立の伝染病研究所を辞した次第でございます。辞します時に政府の当路者から、同じ政府の下で仕事をするのだ、殊により能く君のために便利を図ろうとするのではないか、学者が学問の研究をするのに、所管が変わっても差支えはないではないか、何も毛嫌いをするには及ぶまいと言つて懇々説かれましたけれども、私は断然辞しました。と云うのはそこが私の福沢先生から精神的感化を受けました所で、人間の独立自尊はここにあると私は考えたからでございます。

で、私の学問の主義方針と云うものは、これは決して私が発明したことでも何でもありませんが、とにかく先進の人の研究した所の主義方針に基き、今日まで独立してやつて居りましたのに、私のこれまでやつて居つたのとは全然主義方針を異にして居る人の下で仕事をするのは出来ない。我が学問の独立心を尊重する以上は、節を屈してまでもそこに居らなければならぬと云う必要はないと、こう決心した次第でございます。しかしながらも私が二十年前の如く一の素寒貧の者でありましたならば、或いは学問の研究は自由にやらせるから此方へ来いと言われれば、或いは心ならずもそれに従わなければならぬような場合に立ち至つたかも知れませぬが、先に申しました通りに先生の御戒めがあり、そうして適當の人を得て居りましたために、何をするにも先立つものは金、その金のことに就いては二十年來田端氏の非常なる努力に依り多少の貯えが出来ました。無論私共の仕事のごさいますから、そう大きい金を貯えることは出来ませぬが、とにかく自分の主義をどうやら貫徹させることの出来るだけの兵糧は出来ましたので、この後は再び二十年前の昔に立帰り、即ち福沢先生から実質的の保護を戴いた本に帰り、新たに研究所を創立して引き続き研究を進めることに致しました。しかし二十年前には総てを私一人で致しましたから、研究の上の於ても非常に骨が折れましたのでございますが今日では大分養成した同志の人も出来、手が揃つて居りますから、今後の研究に於きましては過去の二十年に比して着々進んで行くことと考へて居ります。而して今回の私の行動は、或いは間違つて居るかも知れませぬが、私自身の考へと致しましては、私が予て福沢先生から受けて居りました所の精神的教育、即ち独立不羈と云うことを実行したものと、自ら誇つて居る次第でございます。

然らば今後は如何なる方針で進むかと申しますれば、やはり自己の学問の独立を保護し、いわゆる威武も屈する能

わず、富貴も淫する能わずと云う所のことを十分に努める積りであります。而も私共の専門として居る学問は、今日未だなかなか完成したと云う訳ではありません。今後開拓して行く所の野は非常に広いのでございます。で、過去の二十年間は内地であつて、内地の伝染病その他に就いて研究を致し、今後もお研究すべき事柄は無論沢山あります。主なることに就いてはほぼ研究が出来、多少国家のために尽した積りでございます。そこでこれから執ろうと思ひますことは、どうぞこれを今一步進めて海外に向つて発展させたいと思ひるのでございます。

我が日本民族は、他の人種よりは盛んに繁殖して居ります。而もこの繁殖力は今後益々旺んで、我が同胞は非常に殖えて行きますから、到底この狭い内地に収容することは出来ない、どうしても海外に向つて発展せしめなければならぬ。そこで今日までも或いはアメリカに、或いは南米に、その外新領土の台湾、朝鮮、満洲等に送つて居るけれども、なかなかその位では足らぬ。殊にアメリカにはいわゆる排日熱が盛んで、この上我が労働者を送ることは出来ないから、勢い他の方面に向わなければならぬ。他の方面とすると今の所南洋の方面より外はないと思ひます。然るに南洋方面は土地が豊饒で、我が同胞の發展する余地は十分にありますけれども、不幸にして伝染病が多い。或いは悪性のマラリヤとか、その他我が邦に無い所の伝染病が沢山あります。ヨーロッパ辺りの文明国で新たに殖民地を開きますには、先ずその土地の健康如何ということを調査し、もし健康に適しなかつた時には、その土地を健康にして、然る後初めて殖民すると云うようにして居ります。ドイツがアフリカの一部分を取つて殖民をしますにも、或いはイギリスが各地に殖民をしますにも、第一にはその途の有名なる学者を派遣してその土地の衛生状態を十分に研究し、然る後殖民すると云う方針を採つて居ります。私の師として居ました所のコッホ先生の如きは、或る時はイギリスから雇われてアフリカに行き、その土地の固有病の研究に従事し、或いはドイツ政府から派遣されて殖民地の衛生上の調査をなし、研究せられたようなことが度々あります。所が日本は南洋方面に向つて近來發展を始め、森村その他の所からゴムの栽培に就いて大分人を送られて居るようで、他日これは有望の事業となるだろうと思ひます。その他南洋にはまだ有望なる事業が多いけれども、その土地の健康状態に就いては更に研究が届いて居りませぬからこの後私はその方面に力を用い、自分の専門とする学問に依つて国家のために尽したいと思ひて居ります。又そう云うことが私は福沢先生の御遺志にも副うことと考へて居ります。学問の神聖と云うものは、如何なる暴政府といえど

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

も、如何なる人でも庄迫することは出来ぬ、自分の学問の主義方針のためには威武にも屈せず、富貴も淫する能わず、貧賤も移さぬと云うことの出来たのは、全く先生の御教訓の賜ものであると存じます。

(三田評論、第二一一号、一五―一九頁)

医師奮起の要望

一九一七・大正六年

憲法実施せられてよりここに三十年、議會を開くこと三十八回、挙げられたる選良八千人、この間に於て吾人は政黨の宣言、議員の政見を聞くこと既に幾千万言、外交に、国防に、教育に、工芸に、産業に、經濟に、国是の大綱より行政の小策に至るまで宣べ尽し唱え悉して遺す所なきに似たり。然るに独り奇怪なるは國家の一大事にして從來數ある政黨も千百の政客も一言半句のこれに言及せざるものあり。一大事とは何ぞや、國家運命の源泉たる國民の活力を擁護伸張すべき國家衛生のことこれなり。

そもそも國運の消長は素國民活力の強弱如何に在り、國に剛健の民ありてその國始めて優越なることを得、國家存立の要素は外交、国防はもとより、教育、工芸、皆忽せにすべからざるは論なしといえども、いやしくも國民にして羸弱不能ならんか、外交、国防、何をかなさん。教育、工芸、遂に望むべからざるは何人も理解に苦しまざるべし。見よ歐米列強が前世紀の中葉よりして國家の隆興は國民活力の栽培に基因することを覚悟し、經世家の針路は専ら優良國民の養成に集中し、民族衛生の大研究となり、社會政策の実現となり、着々その効を収め、遂に惡疫の撲滅となり、劣悪民族の減耗となり、生産の増加となり、死亡の減少となり、平均壽命の延長となり、労働能率の昇進となり、學術ために闢け、工業依つて振い、国力伸び、国光揚る、皆これ國家衛生に努力したる結果にあらざるはなし。翻つて我が國の現状は如何。惡疫は縱まに瀾漫し國民の壽命は漸次に短縮し、戦慄すべき生活上の危險は眼前に迫り来たり國家の深憂これに及ぶものなきに拘らず、國民の多くは恬として覺らず經世家はこれに一顧を与えんとせず奇怪にあらざして何ぞや。

この秋に方りて國民は宜しく半世紀の昔に溯りて我が邦の文明史を回顧するの要あり。建国二千五百年、國を鎖して深く眠りたる我が嶋帝國の門扉を一排して歐米の文華を迎え、國民を率いて世界列強の伍班に奮進せしむべく大政維新の氣運を造りたる我が先進の國士は果して何種の人なりしや。知らずや多くは醫學を修めたるもの又は醫學の門

に出でたる士なりしなり、洋学者なりしなり、科学者なりしなり、換言すれば我が開国文明の輸入は実に医人の手に依りて開発せられ文化の高圧力は医学の一路を通じて国内に殺到せしなりと謂うも誰かこれを否定せん。正にこれ文明の国家は基礎を科学に築き国政は科学の運用に頼らざるべからざる自然律の発動と見るべく、いわゆる明治維新なる国民の大覚醒は空想的東洋思想が科学的泰西思想に破られたる現象に外ならざりしなり。然るを近時の状況前段の如きものあり、けだし維新当時の気魄ようやく弛み科学的思想やや転退したるの結果にして、政事を論じ政事に関与するものは堅実真摯なる実務家にあらず、蓄蘊深遠なる科学者にもあらず、従つて社会と科学との聯関を徹底的に理解せず徒に輕佻なる空論に耽るもの多く、国民もまた政事はいわゆる政論家の事となし深く政事の根本を究めず、国家衛生の擁護者たる医学者を目して長袖者流として度外視し、医学者自身もまた政事を以て俗世間の事となし、政事に関与するを以て自ら屑とせず、滔々の風遂に今日の弊を致せり。畢竟多数国民及び政治家なるもの皆徹底せる学理に起因せる政事的觀念に欠乏せるがためなりとす。

議政府たる帝国議會は、言う迄もなく社会各方面の智見を蒐め國家の画策施設に遺漏なからんことを期するに在り。然るを何事ぞ、衛生の如き国家存立上の最要政策を閑却するは実に國家の大欠陥にして國家の大本を誤り、国運を危うするものと謂うべし。吾人はいづくぞ永くかくの如き政界の現状を黙視するに忍びん。我が同胞は近時世界の戦局に鑑みて更に大いに覺醒したる所あらん。國家百年の計を定めて聖代を万世に伝うる所以のものは実に徹底せる学理に起因せる健全なる政事的觀念に依るべきことこれなり。

叙上の見地よりして古人は真摯にして人格高き医人を挙げて議政府に送ることは目下の最急務なるを確信し今回の総選挙に際し全国の医師団相應呼して医師候補者の蹶起を切望する所以なりとす敢えて宣言す。

(時事新報、三月十八日)

挨拶（北里研究所披露会）

一九一八・大正七年

閣下並びに諸君、本日は吾が北里研究所が社団法人の資格を取得せしを以て平素本所に対し深甚の御同情を寄せられたる方々を御招待致して御披露申上げんとしたる処、時節柄御多用中にも拘らせられずかく多数の御来会を得たるは不肖を始め社員一同の深く感謝するところであります。

そもそも吾々がこの研究所を創始したるは実は大正三年十一月のことでありまして、吾々が野に下った当時であります。その際江湖の御同情を得て開所式を挙行したるが、その時御列席下されたる方々も今夕御出席下され吾々はこれ等の方々の御同情を受けて更に奮闘努力を致すの決心をなせり、殊に吾が研究所に於て学ばれたる同窓生諸君は後援会を組織し寄附金を贈られ、又同窓生以外知己の人々よりも寄附金を賜わりたるを以て、これを基本金として丁度約四年の星霜を閲したるが、事業に就いては吾々は力の及ぶ限りを尽して努力し、その事業の一部は既に世間に発表したるも又今日なお継続従事中のものも少なからず。

元来吾々はこの研究所に於ては、同志のみ集まりて研究をなす積りなりしも講習の希望者あるため、年二回講習を聞き、大正四年より今日迄に七回、現にただ今七回生を講習中なり。研究所はもとより微力にして多数を収容するの余地なきも、毎回三十名を定員とするに拘らず希望者これに超過するを以て毎回四十名許を収容せり。

吾が研究はコッホ先生の薫陶を受けたる不肖が起したるものなれば先生のことを記念せんため、先生が千八百四十三年十二月十一日に誕生せられたるを以て、その日を卜して通俗講演会を開会し、以て一般公衆に学問の利益を頒たんとす。これはコッホ先生の遺志であります。けだし先生は常に吾々に向って言われたのに「学問は高尚なることを研究するのみにて独り自らを楽しむは本意にあらず、これを実地に応用し人類に福祉を与えてこそ学者の本分を証すものにして、真にこれ学者の任務なり」と。吾々は即ちこの先生の遺志を紹ぎ、成るべく研究の成績を一般人に知らしめ以て学問の恩恵を広く頒たんとす。

SAMPLE SHOPS.com

血清及び予防液のことに就いて一言せんに、血清療法は明治二十二、三年にドイツにて吾々が創建したるものにして、その後一般に行わるるに至れり。それ一定の伝染病者はこの療法によりて再生の恩沢に浴すも、而もなお今後幾多の研究を重ね、これを完全の域に進めんには前途はなお遼遠なるものあるなり、予防液のこともその当時より行われたるが、現時に到りては彼の感作ワクシンの成功に由りて、著しき進歩を見るに至れるも、今後なお益々研究を進めざるべからず。

本所は微力なるが故に、多数の人を海外に派遣し、学問の研究及び日新医学の状況を視察せしめんと志はあれども、実行はすこぶる難しとするところあり。然れども今は現に南米ブラジル国へ二名を派遣して、移民のために将来の計をなし北米合衆国へ一名を派遣して研究及び視察をなさしめあり。何分資金の少なきため、意の如く多数人を派遣する能わざるを遺憾とす。

欧洲戦争以来、外国雑誌、殊にドイツの医学雑誌来たらざるため、先方の学問進歩の状を窺う能わざるは遺憾とする所なり。これと同時に此方の業績をも外国へ知らせんがため、昨年来英仏独語等にて記述せる雑誌を発行し、年二三回の発行にて既に第四号を出せり。普くこれを世界各国の学者の許に送りて我が国の医学を広く世に紹介せんとす。又邦文の雑誌は細菌学雑誌にして明治二十八年より発行し、既に二百七十七号に達せり。研究の結果を实地に応用せざればその効果は無きことなるが故に、本所には附属病院を設け、患者を収容してこれに應用することとし居れり。

本所は従来は不肖一個人のものなりしが、開所式の当日にも述べたる如く、法人組織として将来の基礎を確立せん事は素志なりしも、開所の当時は微力にしてその志を達する事能わざりしが、三年後の今日に至り、ようやく法人とするも差支えなきこと、即ち今後の維持方法も十分なりとの見込も立ちたるが故に、さきに内務大臣に対し法人組織とすることを願出で許可を得たるを以て、今後は益々奮励努力し、現在の三十万円許の微力なる資産を漸次増加し、資金を充実し、法人の定款にも述べある各種の事業を遂行し、一は以て国家のため、一は以て世界人類のために貢献せんとす。希くば各位の御同情と御援助とによりて、吾々の目的を達せん事を祈りいささか以上の次第を述べた次第であります。

(細菌学雑誌、第二七八号、八三一―八三三頁)

コッホ未亡人宛書翰訳文

一九二〇・大正九年

ドイツと日本とは政治上の敵なりき。されどこれは政府間の戦争にして国民間の戦争には非ざりき。且つ日本国民は無暗に敵国民を悪み或いは憤るものにあらずして又従らに「徒に」か「亢奮するを敢えてなざざりき。日本学徒のそのドイツ学師に対する関係は戦火のために毫も影響せらるることなかりき。日本学徒のその師及び朋友に対する敬愛の念は戦雲天を覆う時に於ても換ることなかりき。故コッホ先生に対する我が真心もなぞて往時と変るべき。毎年五月二十七日には戦争中も戦争前に於けると同じく祭典を挙げたり。学問は全世界人民のためにあり、国民的感情に支配せらるることを許さず。本年の第十年コッホ祭典は神祭にては特に盛大に挙行さるる例なれば目下準備中なり。これに依りても吾々日本人は戦事は個人と個人とのものにあらずして単に政治上のものなりしことを知らるべく、今日戦争止みし上は光風霽月再び握手せんこと何等顧慮する所なし。吾人は一旦平和の結ばれし以上は敵意を挟むべきに非ず。我が東洋の国は孔子教を奉じて深く正義道徳を知るもの、この関係に於て西洋と東洋とは或いは異にする所あらんか。

(細菌学雑誌、第三〇三号、六四二頁)

SAMPLE
Shoshi-Shin.com

式 辭 (医制發布五十年記念祝典)

一九二四・大正十三年

閣下ならびに諸君。

予^か御案内申上げたる如く、本日ここに我が日本医師会主催の下に「医制」發布五十年記念祝典を挙ぐるに当り、かくも賑々しく閣下ならびに諸君の御來臨を辱^{たは}うするを得たるは、まことに光榮とし且つ欣幸とする所であります。

御承知の如く明治六年三月文部省内に「医務局」なるものが創設せられ、さきに官命を奉じ衛生制度取調べのため欧米各国に派遣せられたる故長与専齋先生が、この時恰も帰朝せられたので、先生を挙げて医務局長に任じ、主として「医制」の調査に従わしめられたのであります。これ実に本邦に於ける衛生事業の発端にして長与先生はこの年十二月「医制」なるものを編み、文部省を経て太政官に上申せられたのであります。この医制なるものは前後七十六箇条より成り、

第一条ないし第十一条は全国衛生事務の要領、地方衛生及びその吏員の配当を定め、

第十二条ないし第二十六条は医学教育の規定を整えてその実行を奨励し、

第二十七条ないし第五十三条は医術開業試験ならびにその免許、

第五十四条ないし第七十六条は薬舗開業試験ならびにその免許をそれぞれ規定して、後來各業に就く者の方針を明かにしたるものであつて、凡そ医事衛生に交渉ある制度の基礎となるべき事項は網羅して余すところなく、換言すれば今日の医事衛生に関する百般の法規制度はこの「医制」にその源を發して居ると謂うても決して過言ではない。勿論この医制の編成に就いても長与先生その他の諸先輩が一方ならざる苦心を払われたることであります。何分にも維新草創の際、文物制度皆革まるの秋にして、素より旧制典故の抛るべきものなかつた時代のことであればこの「医制」なるものと言わば、長与先生その他諸先輩の致されたる努力の金字塔であり、又苦心の結晶とも云うべきものにして、この意味に於て「医制」の創始者たる長与先生は、我が医事衛生に関する制度の父とも称すべきであります。

う。而してこの医制は翌七年三月に至り、太政官より先ず東京、京都、大阪の三府に於て事情を酌量し、徐々に着手すべしと云う布達を発せられたのであります。即ち今日の言葉で申さば漸進的に実施せられたのであります。この一部実施の時より指を屈すれば、恰も本年三月が満五十年に該るのであります。而して八年六月に至り医学教育に関する事項のみを文部省の所轄に止め、その他の事項は凡て内務省第七局に移管され、同九年一月その名が改められて「衛生局」と称せらるるに至ったことは皆様も御承知の如く、これまた長与先生の創意に係りこの局名の改称に就いては、甞め原語を直訳して「健康」もしくは「護健」とせられようとしたが、或る日莊子の中に「衛生」と云う文字のあることを思い出され、遂にこれを採用せられたるものであると長与先生の自叙伝「松香私志」に書かれてあります。これに就いては生前長与先生と深交ありし、京都の明石博高と申さるる人の助言も与って力あったと明石氏の伝記にあります。さて「医制」の生れてより正に五十年、半世紀を閲しました。諺にも温故知新と云うことがあります。この間、我が医学は如何に進歩し我が医術は如何に普及し而して我が衛生行政は如何に発達しましたるか。今幸いにして自らこれを回想すべき機会を得たる私共にとりては、今更の如くこの「医制」の心を索ねこの「医制」のために記念しこれを祝福すると共に先輩の苦心を追懐してその遺功を追頌し併せて多年医事衛生の改善向上に貢献する所浅からざる諸君の努力に敬意を表するは特に斯道に一身を托する私共の光榮ある儀礼の一であると信じます。これ即ち本日ここにこの式典を挙ぐるに至りましたる所以であります。尤も昨春文部省主催の下に挙げられたる「学制頒布五十年記念祝典」の例に倣わば、或いはこれを内務省の主催に委ぬべきであるかも知れませぬが、既に日本医師会も昨冬法律上全国医師団体の中枢機関として認めらるるに至りましたる関係もありますので、敢えて自ら進んでこれが主催者となり日本医師会としての使命の一を果さんとするに至ったのであります。

唯準備上幾多の齟齬を来たし所定の計画を充分に実現し得なかつたことは、誠に遺憾とする所ではありますが、この企てに就いて種々なる御好意を寄せられたる各位に深く謝する次第であります。ここに重ねて本日の来賓各位ならびに賛同者諸君に深甚なる敬意を表して開会の御挨拶に代うる次第であります。

(医政(復活)第一巻第一号、四二―四三頁)